

令和7年度  
**交通安全**  
ファミリー作文  
コンクール



警察庁

## 令和七年度交通安全ファミリー作文コンクール優秀作品集の発刊に当たって

皆様には、日頃から交通安全活動に御尽力をいただいておりますことに対し、厚く御礼申し上げます。

さて、昨年の交通事故による死者数は、二千五百四十七人で、前年と比較して百十六人減少し、統計が残る昭和二十三年以降で、最少となりました。

しかしながら、今なお多くの尊い命が交通事故で失われていることには変わりなく、次代を担う子どもが犠牲となる痛ましい交通事故や、飲酒運転をはじめとする悪質・危険な運転による重大な交通事故も依然として後を絶ちません。政府が目標とする世界一安全な道路交通を実現するためには、各界各層の一層の連携した取組が必要と考えております。

交通事故は、国民の誰もが当事者となるおそれのある身近な問題です。安全で快適な交通社会を実現するために、国民の皆様一人一人が交通ルールを守り、自動車や自転車の運転者、歩行者がそれぞれ相手の立場に配慮し、思いやりの気持ちをもって交通マナーを実践していくなど、積極的に交通安全に関わっていくことが大切です。

「交通安全ファミリー作文コンクール」は、家庭、学校、地域等において交通安全について話し合ったこと、また、これらを通じて思ったことや感じたことなどについて、作文を通じて国民の皆様が共有することで、具体的な交通安全活動の実践につながる取組として四十七年の永きにわたり続いてまいりました。

今年度も小学一年生から中学三年生まで三千四百二十九名の応募をいただきました。

本書は、その応募作品の中から、最優秀作（内閣総理大臣賞）をはじめとする優秀作品をまとめたものです。この作品集を通じて、国民の皆様が交通事故のない社会を願う気持ちを共有し、そのことが更なる交通ルールの遵守と交通マナーの向上につながることを心から期待しております。

結びに、本事業の実施に当たり、御協力いただいた関係の方々には厚く御礼申し上げます。

令和八年二月

警察庁交通局長 日下真一

△主催▽

警察庁

一般財団法人 全日本交通安全協会

公益財団法人 三井住友海上福祉財団

一般財団法人 日本交通安全教育普及協会

△後援▽

内閣府

文部科学省

△協賛▽

全国共済農業協同組合連合会（J A 共済連）

## 目次

### 《小学生の部》

#### 最優秀作〔内閣総理大臣賞〕

頭のイナズマ……………3

愛媛県愛媛大学教育学部附属小学校 二年 若狭 早

#### 優秀作〔国務大臣・国家公安委員会委員長賞〕

とうげこうできをつけること……………5

埼玉県久喜市立太田小学校 一年 森永 紗礼

わたしが大きくなったらたくさんの人をしあ  
わせにしたい……………6

大分県大分市立野津原小学校 二年 竹山 明里

やさしい横だん歩道……………7

大阪府大阪市立丸山小学校 三年 中西 広

命を守るジュニアシート……………9

群馬県太田市立強戸小学校 四年 尾内 美玲

お父さんと行く鶏ふん配達と交通安全……………10

鹿児島県長島町立川床小学校 五年 浦 來叶

登校班の問題児……………12

栃木県那須塩原市立埼玉小学校 六年 前野ちえり

#### 優秀作〔文部科学大臣賞〕

大切な人を思い浮かべて……………13

大阪府四條畷学園小学校 五年 谷 青葉

#### 佳作〔警察庁交通局長賞〕

こどもタヌキのこうつうじこ……………15

宮崎県宮崎市立大淀小学校 一年 木村 隼輔

あんぜんにあるく……………	16	ただいまを言えるしあわせ……………	24
福島県西郷村立熊倉小学校	一年 中里 心花	茨城県下妻市立下妻小学校	四年 菊地 優莉
ぼくのとうこう……………	17	交通安全を人任せにしない……………	26
香川県高松市立円座小学校	一年 山崎 椋太	石川県金沢市立小坂小学校	四年 杉本 彩樹
かぞくでまもるこうつうあんぜん……………	18	みんなで守ろう自分の命……………	27
茨城県下妻市立大形小学校	二年 染野 心暖	愛媛県四国中央市立長津小学校	四年 村上 央征
こうつうルールをまもろう……………	20	ぼくならだいじょうぶ……………	29
群馬県渋川市立橘北小学校	二年 森川 莉望	香川県観音寺市立観音寺小学校	五年 亀井 涼市
目線……………	21	「ながらスマホ」について……………	30
群馬県太田市立太田小学校	三年 岩田 博都	香川県観音寺市立観音寺小学校	五年 間瀬 羽海
安心・安全は一人一人の心がけ……………	22	交通ルールは命の約束……………	31
茨城県下妻市立大宝小学校	三年 山中 颯真	福岡県朝倉市立甘木小学校	六年 手島 琉生
私が増がいがい者にならないために……………	23	命を守る心配性……………	33
愛知県名古屋市長上野小学校	三年 早稲田 怜	愛媛県松山市立宮前小学校	六年 藤渕 悠玄

失敗から学ぶ防げる事故……………34

愛媛県松山市立石井北小学校……………六年 柳瀬 新奈

審査を終えて〔小学生の部〕……………宮田美恵子 36

右、左、右っ!!……………48

宮崎県延岡市立南浦中学校……………

学びの多様化学校分教室「熊野江教室」二年 小田原みろく

守りたいもの……………50

埼玉県越谷市立南中学校……………三年 金子 由奈

《中学生の部》

最優秀作〔内閣総理大臣賞〕

家族でつなぐ交通安全の輪……………45

福島県いわき市立小名浜第二中学校……………三年 鈴木 彩花

優秀作〔国務大臣・国家公安委員会委員長賞〕

後悔の前のできること……………47

愛媛県松山市立南中学校……………一年 大脇 理緒

優秀作〔文部科学大臣賞〕

交通マナーの大切さ……………51

埼玉県越谷市立北中学校……………二年 岩館 璃沙

佳作〔警察庁交通局長賞〕

お互いに気をつけないとね……………53

愛知県東栄町立東栄中学校……………一年 伊藤 新太

いつか自分に返ってくる運転……………54

愛媛県松山市立勝山中学校……………一年 馬越 真那

交通事故から学んだこと……………56

富山県高岡市立牧野中学校 一年 岡 志織

ルールを守る人を増やすために……………57

栃木県星の杜中学校 二年 青木 心音

ほんの少しの意識で……………59

宮城県仙台二華中学校 二年 高石 孝樹

笑顔の未来へ やさしく運転を……………60

兵庫県神戸市立御影中学校 三年 新美 りを

合言葉は「左右オーライ」……………62

神奈川県川崎市立中野島中学校 三年 吉田 爽帆

審査を終えて〔中学生の部〕……………64

鈴木 春男

# 小学生の部





## 最優秀作

内閣総理大臣賞

### 愛媛県愛媛大学教育学部附属小学校

二年

若狹<sup>わかさ</sup>

早<sup>そう</sup>

### 頭のイナズマ

ズキン、バリバリッ。頭のいたみに、ぼくはびつくりしました。いつもは元気いっぱいなのに、今は何もした  
いと思えません。ぼくは交通じこにあり、頭のほ  
ねがおれ、頭の中で出血してしまつたのです。

きよ年の十二月、お絵かき教室からの帰り道。ぼくが  
自てん車で交さ点をわたつてると……帰りをいそいで  
いる車にドン、とはねられました。ぼくは一メートルく  
らいとぼされて、地めんにたたきつけられたのです。自  
てん車は車にまきこまれ、ガリガリけずられました。夕  
方五時すぎ、空はどんだん夜にむけてくらくなる時間の  
ことでした。

ぼくはヘルメットをかぶっていました。白と黒のかつ  
こいいデザインで、これをかぶっているとよくほめられ  
ました。

「いいなあ、そのヘルメット。」

「レーサーみたいだね。」

ぼくのお母さんも、ぼうしと一体になったヘルメット  
をかぶっています。自てん車にのる時は、かならずヘル  
メット。それをずっとつづけていたから、車にはねられ  
頭をうつても「線じょうこっせつ」ですんだそうです。  
頭のしゃしんには、ビリビリとイナズマのような線が  
入っていました。おいしゃさんから、

「ヘルメットがなければ、かんぼっこっせつ、のうざ  
しようなどになっていたかも知れないよ。それは今より  
ひどいじょうたいで、いのちにかかわるからね。」

とせつめいされて、ぼくはヘルメットの大切さがよく分  
かりました。

ぼくがいるえひめけんは、自てん車にのる人のヘル  
メット着用りが日本一です。けいさつの人がしらべた  
ところ、えひめけんでは七わりの人が着用していたそう  
です。車と自てん車の交通じこで、大切ないのちがいく

つもうしなわれたので、

「ヘルメットをかぶるのは、当たり前。」

このいしきが生まれたそうです。それなのに、着用りつが一わりを切る場しよもまだあります。だからぼくは、ヘルメットでいのちがたすかったことを、これからたくさんの人に伝えたいと思います。

交通じこにあつた時、ぼくは自てん車のライトをつけ、はんしやざいのついたふくを着ていました。右・左・右のかくにんもしていました。どんなに用心していても「まさか」はおこります。だからみなさん、ヘルメットをかぶりましょう。あんぜんとあん心の目じるし、SGマークなどがポイントです。かっこいいデザイン、かわいいデザインのものもあります。いのちをまもるおまもりとして、ヘルメットをかぶりましょう。

今年の六月、ぼくはやっと頭のほねがくつつきました。ぼくの頭のイナズマは、これから二、三年かけてうすくなつていくそうです。ヘルメットがあつて、本当によかったです。



優秀作

國務大臣・国家公安委員会委員長賞

## 埼玉県久喜市立太田小学校

一年

森永<sup>もりなが</sup>

紗礼<sup>さあや</sup>

### とうげこうできをつけること

わたしは、ことしの四がつからしようがつこうににゅうがくして、こどもたちだけのとうげこうはんでがつこうまであるいてとうげこうするようになりました。

おとながいつしよにいないときにそとをあるくのははじめてで、はじめはきんちようしましたが、五ねんせいのはんちようさんについていってあるいていっていません。

わたしのつうがくるは、じゅうたくがいのなかにあるどうろをとおっていきます。このどうろはほどろがないばしょがおおいので、くるまにひかれないうようにはしつこをあるくようにしています。たまに、くるまがすごい

はやさできゆうにまがつてきたりするので、まえをよくみてあるくこともたいせつです。

また、おうだんほうでは、みぎ、ひだり、みぎをかくにんして、てをあげてわたるようになっています。がつこうのちかくのおうだんほうには、けいさつかんのひとや、はたふりのおとうさんおかあさんもいて、こどもたちをみまもつてくれます。

かえりは一ねんせいだけのげこうはんでかえります。いえがとおくにあるわたしは、とちゅうからはひとりになつてしまうときもあります。そんなときは、ちいきのみまもりのおじいちゃんがつしよについてきてくれたりもします。

まいにち、たくさんひとたちのおかげであんぜんにとうげこうできています。ほんとうは、くるまにのつているひとがスピードをだしすぎないようにしたり、こどもたちも、とびだしたりよそみをしないなど、かならずルールをまもれば、みまもりがなくてもあんぜんにとうげこうできるのになとおもいました。

おかあさんに、このことについてはなしたら、「そうだね。ひとりひとりがしつかりと、こうつうあ

## 大分県大分市立野津原小学校

二年 竹山 たけやま 明里 ひかり

んぜんをいしきするのがだいじだね。」  
とうなずいてくれました。そして、もうひとつ、  
「でも、まだぜんいんがルールをまもれていないから、  
じぶんのことはじぶんでまもらなければいけないね。」  
といわれました。

「おうだんほどのしんごうがあおだとしても、ほん  
とうにくるまがきていないかもうちどかくにんしてか  
らわたること。くるまのしんごうがあかでも、とまらず  
にはしってきてしまうくるまがいるかもしれないから  
ね。」

おかあさんのはなしをきいて、わたしは、しんごうが  
あおでも、もういちどまわりをよくみてからわたるよう  
にしようとおもいました。二がつきからはもつときを  
つけて、これからもあんぜんなとうげこうをしていきたい  
とおもいます。

わたしが大きくなったたらたくさんの人をしあ  
わせにしたい

わたしに、大きな夢ができました。それは、大きくなっ  
たら、たくさんの人をしあわせにすることです。

夏休みになってから、毎日朝に、おかあさん、おとう  
さんの3人で、交通安全の活動をしながら、ゴミ拾いを  
やって歩いています。たまにお兄ちゃんたちも、いっしょ  
に歩きます。おとうさんとおかあさんは、交通指導員で  
す。

毎日とてもあついです。朝なのに歩いているだけでも、  
あせがいっぱい出て、ふくがビチョビチョになって、ふ  
くをきがえたくありません。

わたしたちを見ると、スピードを出して運転している  
人が、スピードをおとしてくれます。そして、スマホ運  
転の人が少なくなったので

「交通安全をしてよかったなー。」

と思います。

ゴミ拾いでは、タバコのすいが多いです。ジュースのカンやペットボトルも多いです。ビールやチュウハイのカンも拾います。

タバコは、運転しながらすっているのだと思います。火を付ける時によそ見運転でじこをしないか心配になります。

ビールやチュウハイのカンを拾うと、いんしゅ運転をしているのかなあと思います。じこをしたらあぶないです。

なんでゴミを車のマドをあけて、道路にすてるのかなあ？どうしておうちにもって帰らないのかなあ？と思います。

わたしは、道路がきれいになると気持ちがいいので、ゴミを拾い続けます。交通安全にもつながると思うので続けます。

毎日、消防しょのお兄さん、スーパーパーのおばちゃん、ドッグサロンの犬たちに、あいさつしに行きます。みんなニコニコしてあいさつを返してくれます。車の人も

「プップー」

とクラクションであいさつしてくれるようになりました。そしたらわたしは、

「今日も、安全運転してね〜。」

と言いつつながら手をふります。

あいさつしてくれると、とってもうれしくて、しあわせな気持ちになります。だからわたしは、あいさつも続けて行きます。

これからも、交通安全と、あいさつと、ゴミ拾いを続けて、大きくなったらたくさんの人をうれしくして、しあわせにしたいと思います。

大阪府大阪市立丸山小学校

三年

中西なかにし

広ひろ

やさしい横だん歩道

ぼくのおばあちゃんは、目が見えませんが、生まれつきではなく、七年前に運転めんきょしょうを返のうして、五年前には完全に見えなくなりましたそうです。今

まで目が見えていたので、家の中での生活はこれまでとあまり変わらずに過ごしています。けれど、一歩外に出ると、とてもこわいそうです。近所のスーパーまで行くのに、しん号を一つこえていかないといけません。交差点まで来てもしん号が見えないので、何度もしん号を見送って、誰かが来たらその人といっしょに渡るそうです。ぼくがそばにいたら、おばあちゃんのことをたすけてあげられるのになとも思っていました。

ある時、ぼくの家の近くの横だん歩道をわたっている時、音が鳴っていることに気がつきました。お母さんに聞くと、二しゆるいの音があり、目の不自由な人のために、しん号が青になったかどうかかわかるようになっていんだと教えてくれました。音のちがいをよく聞いてみると、「カッコウ」と「ピヨ」の二しゆるいの音があることがわかりました。ぼくは、さっそくこのことをおばあちゃんに教えてあげました。そしておばあちゃんといっしょに音をかくにんしながら、近所の横だん歩道をわたりました。わたりおわたたらおばあちゃんがとてもよろこんでくれたので、ぼくもうれしくなりました。

音が鳴る横だん歩道について調べてみると、交通量の

多い少ないで音のちがいを出したり、東西を走る道路と南北を走る道路で音のちがいを出したりして、どちらの音になったらわたればいいのかかわかるようになっていました。また、大きい交差点では、「カッコウ」と「カカッコウ」、「ピヨ」と「ピヨピヨ」といったように、道路のこちらがわとあちらがわで出す音に少しちがいをつけることで、進む方向がわかりやすくなっているところもありました。

全国の横だん歩道には、音が鳴らないところもまだたくさんあるそうです。ぼくは、おばあちゃんが安心して外を歩けるように、また、おばあちゃんのように目が見えない人が一人でも安心してわたれるように、目が見えない人にとって、「やさしい横だん歩道」がもつとたくさん増えていってほしいなと思いました。

命を守るジュニアシート

きよ年の夏休み中、テレビから悲しいニュースが流れ  
てきた。車とバスが正面しようつし、後ろの席に乗っ  
ていた5才と7才の姉妹が亡くなったというニュース  
だった。その中で一番おどろいたのは、姉妹はシートベ  
ルトを着用していたのに、事故のしようげきでしめつけ  
られてしまったのではないか、ということだった。

事故にあってしまった女の子と年が近いこともあり、  
「もし、この車に乗っていたのが私だったら…」と思わ  
ず考えた。二人ともシートベルトをしていたのに、どう  
して命を落としてしまったのか、とうとい命が失われて  
しまったのか、ふしぎでたまらなかった。

私は気になり、その事故のことを調べてみると、ジュ  
ニアシートを使っていなかった事が判明した。身長が  
百四十センチ※にみたない子どもがジュニアシートなしで  
シートベルトをすると、ベルトが首やおなかにくいこん

でしまい、強いしようげきを受けた時に亡くなってしま  
うリスクがあると初めて知った。命を守るためのシート  
ベルトが、ぎやくにきようきになってしまふ事を知り、  
こわい気持ちと同時に、姉妹を想うとむねがぎゅつと  
なった。

その時私は、あの出来事を思い出した。

「え、まだそんなの使ってるの？」

ある日、友達を車でむかえに行つた時に、私がジュニ  
アシートにすわっているすがたを見て、そう言われた。  
私は顔がカッと熱くなつて、すぐくはずかしくなつた。  
もう小学生なのに、なんだか自分がとても小さい子ども  
のように思えて、いやな気持ちになつた。

家に帰つてから、私は母につぶやいた。

「もうジュニアシートはやめたいな。私も大きくなつ  
たからいらぬよ。」

すると母は、私をだきしめてから、しんけんまなざ  
しでこう言つた。

「これは、あなたの命を守るための大切な物よ。だから、  
同じ目線でお話ができるようになるまで、おねがひだけ  
ら使おうね。」

その時の私は、母の言葉の本当の意味がまだよくわかっていなかった。

母が「命を守るため」や「同じ目線」と言っていた意味が今になってようやくわかった。いつも私がすわっているジュニアシートは、万が一の事故にあった時に、命づなのシートベルトを大人と同じように、きちんと正しく固定できる体かくなるまで必要な、とても大切なそんなものだ。と理かいできたのだ。

今では、からかわれてはずかしいと思っていたジュニアシートは、決してはずかしい物ではなく、命を守ってくれる物だとむねをはって周りのみんなにも伝えたいと思う。

そのためにも、ジュニアシートを使う事が少しだけ面倒だとか、周りの目が気になるなどという気持ちだけで、大切な命をきけんにさらさないでほしいとよびかけていきたい。

※現在、日本自動車工業会や日本自動車連盟においては、6歳以上でもチャイルドシートの着用を推奨する体格の目安を、身長百五センチメートル未満とされています。

鹿児島県長島町立川床小学校

五年 浦<sup>うら</sup> 來<sup>くう</sup>叶<sup>と</sup>

お父さんと行く鶏ふん配達と交通安全

ぼくの楽しみな土曜日。今日は、お父さんと一緒に鶏ふん配達に行く日だ。朝早く、まだうす暗い中、エンジンをかけたお父さんのダンプトラックに乗り込んだ。車体が

「ブルブル。」

と震えるのを感じながら、ぼくは、シートベルトをカチツとしめる。お父さんは、いつも

「シートベルトは、命綱だぞ。」

と教えてくれる。ぼくたちの冒険は、この安全確認から始まる。

家を出てすぐは、お店や家が並ぶ見なれた道だ。でも、しばらく走ると、周りの景色は、あつという間に変わる。ぼくたちのダンプトラックは、どこまでも続く田んぼや畑の中の一歩道を進んでいく。朝つゆにぬれた稲がキラキラと光り、遠くには大きな山々が連なっている。鳥の

声が聞こえ、澄んだ空気がまどからスーッと入ってくる。こんな気持ちのいい道だけど、お父さんはいつも真剣な顔でハンドルをにぎっている。

最初の配達先に着くと、お父さんはダンプロトラックをきちんとはじによせて停めた。

そして荷台から鶏ふんの入った大きなふくろをいくつも下ろしていく。一つ一つが重そうだけど、お父さんは、なれた手つきで運んでいく。ぼくも小さなふくろを運んだり、スコップを渡したりしてお手伝いをした。作業中もお父さんは、

「車のかげから人が出てくるかもしれないから、気を付けるよ。」

とか、

「荷物を高く積みすぎると、カーブでバランスをくずすことがあるんだ。」

と、安全に関する色々な話をしてくれた。

何ヶ所か配達していくうちに、ぼくたちはどんどん山の方へ進んでいった。道はだんだん細くなり、カーブもふえてくる。お父さんは、カーブの手前で必ずスピードを落とし、

「対向車が来るかもしれないからちゃんと確認するんだぞ。」

と教えてくれた。見通しの悪い交差点では、一度止まって左右をしっかり確認してから進む。ふだん、自転車に乗っているぼくも、見なれた道でも、こんなに気を付けないといけないんだと改めて交通安全の大切さを感じた。

全ての配達を終え、夕焼けが空をオレンジ色にそめるころ、ぼくたちは家路についた。一日中ダンプロトラックに乗っていたけれど、安全に気を付けながら運転してくれたお父さんのおかげで、ぼくは一度も怖い思いをしなかった。

今日一日、お父さんの仕事を手伝って、働くことの大変さや、食べ物がどのように作られているのかを知ることができた。ぼくも将来、車を運転するようになったら、今日お父さんから学んだことを忘れずに、どんな時も安全運転を心がけたい。

## 登校班の問題児

私は、今年度登校班の班長になりました。初めての大きな役割をまかされ、私はやる気になりました。しかし一つ問題がありました。私の班には一人問題児がいるのです。

その問題児こそ私の妹です。妹は、予定より三か月早く生まれました。身体が小さく手足がかたいためよく転びげがをしています。そして、やんちゃで気が強い性格です。問題児の行動は、注意すると行動がエスカレートしわざと列からはみ出る、突然立ち止まって全く歩こうとしない、同じ学年の友達とかさで戦いをするなどです。妹が原因で、学校に遅刻してしまう事もありました。徐々に妹への怒りがつのっていききました。

そこで母に相談してみる事にしました。妹に注意してくれると思っていたところ、母からの意外な言葉に驚きました。相手を変えるためには、まず自分が変わってみ

るように言われたのです。なぜ相手が悪いのに自分が変わる必要があるのか理解できませんでした。

そんなある日、横断歩道を走って渡っていた妹が、転びました。私は、すぐに妹をおんぶして安全な場所に移動させました。すると妹は、「ごめんさい。」と泣きながら言いました。車がとまってまっていてくれたおかげで、妹は大けがをする事もありませんでした。

その時、以前兄から自分が注意を受けて嫌な気持ちになった事を思い出しました。私は今まで、悪いと思った事を注意してきました。安全運転をしましょう、ながらスマホをやめましょう、などと色々注意を呼びかけていても事故は起こっています。それは、注意を受けた事をよく思っていない人達が多いからではないかと考えました。

しかしながら、注意をする事は、時には必要な事だとも思います。妹に毎日注意をする事は、とても体力がいる事でした。今思うと本当は、妹を守りたいという強い気持ちがあったからできた事です。相手が自分の思いに気付かないうちは、反感をかう事もありますが、注意がきっかけで、相手が考え、気付いたりする事もあると思

うからです。

そこで自分がどのように行動すれば、妹がかわつてくれるかも一度よく考えてみました。まず、注意を守ってもらったらお礼を言ってみる、けがをしてほしくない気持ちを伝えてみる、注意ではなくお願いしてみたらどうか、などがうかびました。

早速行動してみると、今までは全く言う事を聞かなかった妹が、一人でもできると言い、横断歩道の前で立ち止まり左右の確認をしていました。相手を変える事は、簡単に上手くいくわけではありませんが、自分が変わる事で相手にも少し変化がでる事が分かりました。

今の私にできる事は、さ細な事です、危険な行動はしないように相手に愛情をもって伝える事から始めていこうと思います。一人でも多くの人が自分から交通ルールを守る事が、自分だけでなく、大切な人の命を守る事につながると私は信じています。

優秀作

文部科学大臣賞

## 大阪府四條畷学園小学校

五年

谷

青葉

## 大切な人を思い浮かべて

「今日も雨か。」ここ最近、雨ばかりで気持ちはどんよりしていた。パジャマのまま朝食を済ませ、学校から父の声が聞こえた。祖母からの電話のようだ。どうも自転車のカゴにたくさんの食材をつめこんで、バスを崩して転んだらしい。雨上がりに食材を買いたい、祖母の行動もわかる。週末、祖母に会いに行つた。あごに貼られた大きめの絆創こうが目飛び込んでくる。父も真つ青な表情で祖母の話を聞いていた。私が生まれ、夏に購入したという祖母の自転車も、あちこち傷んでいたの買い替えることになった。「お客さん人気のへ

ルメットがありますよ。」店員さんにそう言われた祖母は、首を横に振って口を真一文字に結び「いい、まだ大丈夫。」と断っていた。ご近所の人も被っていないし、恥ずかしいということだろう。私も父母もがっかり。まあそうなるよな。

今春、大阪府警察本部で行われた交通安全コンテストの表彰式で、最優秀のお姉さんが作文を朗読されたとき、会場中がそう然としたことを祖母に話した。それは妹さんが自転車にはねられて地面へたたきつけられる事故にあい、今でも顔の傷あとを手でこすって取ろうとする。交通事故は目に見える傷だけではなく、心にも傷を負うんだと知ったお姉さんは、春から新一年生になる妹さんを事故からどうやって守れるのか、家族で考えて話し合った内容だった。祖母はやりきれない表情で「妹さんもお姉さんもご家族も交通事故でつらい思いをされているんだね。やっぱりヘルメットを被るよ。心配かけてごめんね。」と言ってくれた。祖母にも大切な家族が傷つく苦しさや悔しさをわかってもらえたようだ。これからもヘルメットを被って安全運転してほしいな。

学校帰り、友達とおしゃべりに夢中で横断歩道を渡

ろうとしたとき、ふと、祖母の顔を思い出した。「そうだ、冬休みからチャレンジしている、横断歩道ではドライバーさんに目線であいさつするんだった。」このコンテストがきっかけで、大切な家族を思い行動できるようになった。「みんなも大切な人の顔を思い浮かべて行動してみませんか。」そうすれば周囲もよく見えてくるはずだ。一人ひとりが交通事故を起こさないように行動する。そして運転者も歩行者もお互いに目を合わせて、相手の行動を予測し、思いやりと譲り合いの行動をする。「帰りを待っている人がそれぞれいるんだぞ。」と思えば、気持ちもほっこりして余裕が生まれて、思わぬトラブルや悲しい事故が減らせるのかもしれない。あのお姉さんの切ない表情は大人になっても忘れない。

今日も大阪府警察本部で副賞としてもらったお気に入り真っ白いヘルメットを被って安全運転だ。「おや、虹が出てきたぞ。」祖母はどうしているかな。声をかけてみようかな。

佳作

警察庁交通局長賞

宮崎県宮崎市立大淀小学校

一年

木村

隼輔

こどもタヌキのこうつうじこ

ちいさなタヌキが、たおれているのを、おじいちゃん  
のいえへむかうこうそくどうろでみました。おとうさん  
は、「タヌキのこどもが、ひとりでどうろにとびだした  
のかもしれないね。きつと、おかあさんタヌキがさがし  
ているよ。」といいました。ぼくは、おかあさんにあえ  
なくなつたこどもタヌキのきもちをかんがえました。そ  
したら、とてもかなしいきもちになりました。こどもタ  
ヌキは、ともだちタヌキとあそんでいて、くるまにきが  
つかなくつたのだとおもいました。こどもタヌキは、て  
をあげることができません。うんでんしゅのひとは、こ  
どもタヌキがちいさいから、きづかなかつたのかもしれ

ません。

ぼくも、しょうがつこうからかえるときにくるまにぶ  
つかりそうになつたことがあります。そのことを、いえ  
にかえつてからおかあさんにはなすと、すぐおこられ  
ました。おかあさんは「くるまにひかれてしんじやつた  
ら、だれともおはなしできないし、がっこうにいふこと  
も、あそぶこともできなくなるのよ。」といいました。きつ  
と、おかあさんもぼくがくるまどぶつかることが、こわ  
かつたのだとおもいます。もし、ぼくがくるまにひかれ  
て、おとうさんやおかあさん、おとうとたち、かぞくや  
しんせきみんな、せんせい、おともだちにあえなくなつ  
たらとかんがえたら、こわくなつて、ないてしまいまし  
た。

このまえ、ぼくは、ようちえんせいのおとうとといつ  
しよに、そとをあるきました。おかあさんは、あかちゃ  
んのおとうとをだっこしていました。ぼくは、ようちえ  
んせいのおとうとがきゆうにどうろにとびだすかもしれ  
ないとしんばいになりました。だから、おとうとのてを  
つなぎました。ぼくは、おとうとに「あぶないからはしつ  
たらだめだよ。」といいました。ぼくは、もうかたほう

のてをたかくあげて、うんでんしゆのひとにきづいても  
らえるようにしました。おとうとたちがおおきくなった  
ら、こどもタヌキのこうつうじこのはなしをして、こう  
つうあんぜんのことをおしえたいとおもいます。

## 福島県西郷村立熊倉小学校

一年

中里 なかさと

心花 このは

## あんぜんにあるく

わたしは、まいにちともだちといっしょにどうこうは  
んでがっこうへいきます。

どうこうはんにはおとながいません。だから、みんな  
できをつけてあるきます。さいしよはすこしふあんだつ  
たけれど、いまはともだちといっしょなので、あんしん  
してあるいています。

あるひ、しんごうがあおにかわったとき、わたしはあ  
わてであるきだそうとしました。すると、うしろのとも  
だちが、

「まって。くるまがきてるよ。」

とおしえてくれました。もしそのままわたっていたら、  
とてもあぶなかつたとおもいます。ともだちがちゅうい  
してくれたので、わたしはたすかりました。

いえにかえって、そのはなしをおかあさんにしました。  
おかあさんは、

「しんごうがあおでも、すぐにわたらないでくるまが  
とまったかどうかをよくみるのがたいせつだよ。」

とおしえてくれました。わたしは、

「なるほど。」

とおもいました。それからは、しんごうがあおになつて  
も、いちどとまって、くるまがとまったかどうかをかく  
にんするようにしています。

また、あるひのばんごはんのときに、かぞくでこうつ  
うあんぜんのはなしをしました。おとうさんは、

「くるまのうんでんをしていると、こどもはちいさい  
からみえにくいときがあるんだよ。」

とおしえてくれました。それをきいてわたしは、

「だから、おうだんぼどうをわたるときは、てをあげ  
るんだな。」

香川県高松市立円座小学校

一年

山崎 やまさき

椋太 りょうた

とおもいました。これからも、ちゃんとしてをあげてわたろうとおもいました。

わたしは、かぞくにいろいろなおはなしをきいて、こうつうあんぜんのルールはじぶんのいのちをまもるためにあるんだとおもいました。ルールをまもらなかつたら、じぶんがけがをしてしまうし、かぞくやともだちもとてもかなしくなってしまう。

これからもわたしは、しんごうをまもり、おうだんほどうではてをあげて、みぎとひだりをよくみます。そして、とうこうはんのともだちとこえをかけあつて、みんなであんぜんにがつこうへいきたいです。かぞくにおしえてもらったことをおもいだしながら、げんきにまいにちをすごしたいです。

ぼくのとうこう

「りょうたのおかあさんは、いつまでいつしよにとうこうするの。」

あさ、ぐうぜんあつたともだちにしつもんされましたが、ぼくはへんじができませんでした。五がつになるとじぶんだけでとうこうするがふえてきました。

そのひのよる、おかあさんになぜいつしよにとうこうするのかしつもんしました。

「しんぱいだから。でもそれだけではないんだよ。みんなあんぜんにころがけているとおもうけど、もし、じこやけがをしたときにどうたいおうする。たとえばじてんしゃとぶつかったとき。ともだちがようすいろいろにおちたとき。」

ぼくは、

「ほけんしつまではしつてたすけをもとめる。」  
とこたえました。

「たすけをもとめるのはたいせつだね。でもがつこうからとおかったり、うごけられないときはどうする。」ときかれて、なやみました。

そのあと、かぞくみんなでつうがくろのきけんばしょや、じこやけがをしたときにどうたいおうするかもはなしました。ぼくがじこやけがないようにできることは、きけんばしょをしておくこと。そして、まわりをよくみることに。ふあんなときはいちどたちどまることだとおもいました。もし、ふあんなことがあってもたくさんのちいきのひとや、おにいさん、おねえさんがみまもつてくれています。

とうこうちゆう、しょうがつこうのちかくのおうだんほどうでおかあさんとおわかれます。ぼくはもう、ひとりです。でも、おかあさんとむしやはなのはなしをしながらいっしょにどうこうするのがたのみです。

おうだんほどうにちかづくところちようせんせいや、ちいきのかたがまいあさみまもつてくれているのがみえてきます。

「おかあさんいつてきます。」

「きょうもたのしんでおいで。」

と、いつものハイタッチをしておうだんほどうをわたります。きょうもみんなにみまもられながら、げんきにかつこうへいつてきます。

## 茨城県下妻市立大形小学校

二年

染野

心暖

## かぞくでまもるこうつうあんぜん

わたしのかぞくは、おとうさん、おかあさん、いもうと、おとうとの五人です。いもうとは五さい、おとうとはまだ二さいです。わたしは、一ばん上のおねえちゃんなので、みちをあるくときは、いもうとやおとうとの手をにぎって、みんながあんぜんにすごせるようにしています。

わたしは、まいあさ学校まであるいていきます。いえを出るとき、おかあさんはいつも、

「車に気をつけてね。」

と声をかけてくれます。さいしよは、あいさつのように

きいていましたが、ある日、そのいみがよくわかるできごとがありました。あさ学校へむかっているときに、おうだんほどのしんごうが青になったのでわたろうとしました。すると、よこから車がはしってきました。とまると思ったら、その車はまがってきて、わたしの目の前をとおりすぎました。もし、かくにんしないであるき出していたら、とてもあぶなかつたです。そのとき、「しんごうが青でも、右と左をよく見てからわたるように。」というおかあさんのことばを思い出しました。

わたしのかぞくは、こうつうあんぜんのために、三つのやくそくをきめています。

一つ目は、「しんごうはかならずまもること」です。赤しんごうではげつたいにわたってはいけないし、青になっても右と左をよくたしかめてからわたります。

二つ目は、「車にのるときは、かならずシートベルトをすること」です。おとうさんやおかあさんがうんてんするときも、どのせきにすわるときも、いもうとやおとうともかならずシートベルトをします。おとうさんは、「こうつうじこからのちをまもるために、シートベルトはたいせつだよ。」

といいます。でも、おとうとは、チャイルドシートのベルトをいやがるときがあります。そういうときは、わたしが先にシートベルトをつけるところを見せると、おとうともまねをしてつけることができました。おとうさんやおかあさんが、

「おねえちゃんがお手本になってくれて、たすかるなあ。」

といって、ほめてくれました。

三つ目は、「車のちかくをあるくときは、すこしはなれること」です。どうろのはしにとまっている車は、きゅうにドアがあいたりはしり出したりするかもしれませんが、車からすこしはなれてあるけば、気づいてよけることができます。子どもは小さいので、うんてんしゅさんから見えないことがあるそうです。だから、まわりをよく見て気をつけたいと思います。

この三つのやくそくをまもることで、わたしたちはあぜんんにすごせています。これからも、かぞくといっしょにこうつうルールをまもりたいです。なぜなら、じぶんのいのちもかぞくのいのちも、とてもたいせつだからです。

二年

森川 もりかわ

莉望 りの

こうつうルールをまもろう

わたしは、まいあさ学校へ行く時に、とう校はんどとう校しています。ほいくえんにかよっている時に、おうだんほどをわたる時は、車がきていなくてもすぐにわたらず右、左、右をかくにんすること、手をまっすぐにあげてわたることを教えてもらったので、今でもそのこうつうルールをきちんとまもるようにしています。

わたしのすんでいるちいきでは、近じよのおばさんがボランテアでまいあさはたふりをしてられています。わたしのおかあさんとおばあちゃんも「ありがたいよね」とよく話をしています。

ある日、わたしがあさとう校していた日のことです。いつもボランテアではたふりをしてきているおばさんがどうろのはじっこでたおれているのを見ました。わたしは、いつもおばあちゃんと手をつないでとう校はんのしゅうごうばしょまであるいていくのですが、たおれ

ているおばさんを見たわたしのおばあちゃんは、すぐにそのおばさんの近くに行つて、「だいじょうぶですか」と声をかけていました。おばさんは青しんごうでおうだんほどをわたるほかのともだちを見まもっていた時に、しんごうむしをした車にひかれてしまったそうです。

いしきは、あつたけど足をけがしてうごけなくてきゆうきゆう車ではこばれていきました。いつも見ているおばさんがたおれているすがたを見てわたしは、とてもこわくてかなしくなりました。そのつぎの日からおばさんは、はたふりができなくなつてしまいました。「やっぱり見まもつていないとながあるかわからないからこんどからばばがはたふりをするね」といつてわたしのおばあちゃんがはたふりをしてくれるようになりました。わたしは、それを聞いてとてもあんしんしました。

じ分がこうつうルールをまもつていても、車にのつている人がまもつてくれないとじ分がおきてしまうことがわかりました。でも時にはじ分がきちんとルールをまもつていないからじこにまきこまれてしまうこともあります。おとなも子どももみんながこうつうルールをまもつてじこが一つでもすくなくないなとおもいま

した。そしてまわりで見まもつてくれているおとなの人にかんしやしなればいけないなど思いました。

## 群馬県太田市立太田小学校

三年

岩田<sup>いわた</sup>

博都<sup>ひろと</sup>

### 目線

ぼくの家から小学校までは、歩いて十五分くらいかかります。大きな交差点がいくつかありますが、ほとんど真つすぐな道です。小学校に入る前に、歩道を歩く、横だん歩道をわたるときは左右をよく見て手をあげてわたる、など、何回かお母さんといっしょに登下校時にちゅう意する場所をかくにんしたので、交通安全については大じょうぶだと思っていました。

ところが、雨がふったときや習い事があるときにお母さんが車でおくりむかえしてくれるのですが、その時大じょうぶという気持ちがちがっていただけに気がつきました。お母さんの車はSUV車という少し車体の高

いタイプの車で、その助手せきにぼくはいつもすわります。その時、ぼくがいつも見ている風けいとがらつとかわりました。目線がいつもとちがうのです。小学校に通う友だちよりも高くなり、友だちを見下ろします。歩きで歩道を通っている人たちを左手に、ぼくは車道を行きます。車のすぐ左どなりには、同じ時間たいをいそぐ、中学生や高校生の自転車を通ります。歩道を進む自転車は、小学生の列を見ついたり植木などに出くわすと、それらをよけるために車道に下ります。今度は、車道にトラックや大きい車が来ると歩道にもどります。いつも自転車自分たちの列をよけてくれるのはわかりましたが、こつやつて進路を変えているのは知りませんでした。また、車に乗っていると、車からは見えにくいところがあるのが分かりました。運転席からだ、車のすぐ左後ろがよく見えないので、少しこわくなりました。そういうえば、交差点の歩道の近くに「左まきこみちゅう意」という立てふだがあつたのを思い出しました。それはこのことだなと思いました。

目線を変えてみると、初めてわかることができました。これからは、歩いている人の目線、自転車に乗っている

人の目線、車に乗っている人の目線を考えながら、グリーンベルトを真つすぐ歩く、車の左後ろには近づかず少しはなれたところを通るなどにちゅう意して、交通ルールを守り歩いていきたいです。

## 茨城県下妻市立大宝小学校

三年

山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>  
颯<sup>そう</sup>真<sup>ま</sup>

### 安心・安全は一人一人の心がけ

「えっ！また？」

ある朝、キッチンの方からお母さんの声が聞こえました。テレビを見ると、小学生がまきこまれたじこのニュースでした。五月ごろ、下校と中の小学生のれつに車がぶつかるといじこが立てつづけに起きていたからです。

ぼくは、急にとてもこわくなりました。どうしてかという、いつも学校や家までふつうに安全に行けると思っていたからです。

三年生になった今では、右左右と十分に安全かくにん

をしたり、れつからはみ出さないようにしたり、横だん歩道のしん号もきちんと守って、毎日登下校出来ていました。でも、それは当たり前のことではないんだと気づかされた出来ごとでした。

こんなかなしいじこは起きてほしくないけれど、いつ、どこで、だれに、何がおきるかは分かりません。ただ、ぼくたちが今、安全な登下校が出来ているのはなぜだろう？と考えてみると、わすれてはいけない三つの大切なことが見えてきました。

一つ目は、安全な通学ろにせつていさされていることです。通学ろの中、歩道橋をわたります。車で帰った時は、道をそのまま進んだので、

「こつちの方が近いのにどうして。」とお母さんに聞くと、

「車の通りようが多くてあぶないから、少し遠回りしても安全な歩道橋をわたるんだよ。」

と教えてくれました。そうやって、一つ一つ、きけんを回ひしてくれていることを知りました。

二つ目は、ドライバーの人も気をつけてくれていることです。決まったスピードで走るだけでなく、横だん歩

## 愛知県名古屋市長上野小学校

三年 早稲田 怜

### 私が増がいに者にならないために

夏休みに家族と豊田市の交通安全学習センターに行きました。そこでは、ゴーカートなどの乗り物に乗ることができたり、実さいの道路のように信号機や横断歩道があり、楽しみながら交通ルールを学ぶことができました。

この三つのことを通して、「ありがとう」と感しゃの気持ちでいっぱいになりました。そして、このことはぼくだけでなく、通学はんのみんなや友だちにもつたえたいと思えました。

いよいよ来年の春には、弟も一年生になります。ぼくが感じたことを弟にもしっかりと伝えて、安心、安全に登下校出来るよう、ぼくもいっしょに見守っていききたいです。

私は自転車シミュレーターを体験しました。始めは自転車に進むことはかん単だと思っていました。しかし、実さいにやってみると、曲がり角で歩行者にぶつかってしまい、相手がたおれてしまいました。ぶつかったげんいんを考えてみると、曲がり角のかべで歩行者が見えなくて、気づくのがおそくなつたことだと思えます。また、かべのすぐ横を走っていたのでより発見がおくれたのだと思えました。もう一つ挙げるならば、スピードが速かつたのかもしれない。ぶつかることはさけられないとしても、もう少しスピードがおそければ、相手のけがは最

小げんにすんだのではないかと思いました。

私は三年生になって自転車で行動することがふえてきました。ふだんは気にしていなかったけれど、よく考えてみると、私がよく走る公園までの道にある曲がり角もあぶないことに気づきました。今後は、角を曲がる時には、「かべの向こうから歩行者が来ているかもしれない。」「もしもの時のためにすぐ止まれるスピードまでげん速する。」という二点に注意して走ろうと思いました。

そして、万が一私が自転車に乗っている時に歩行者とぶつかった場合は、まず最初に、相手がけがをしていなかを聞くこと、次にお母さんに連らくをして、けがをしていたら周りにいる大人に助けを求めることを家族で話し合いました。

豊田市交通安全学習センターに行ったことで、自転車に乗る時に気を付けることを学ぶことができて、良い体験になりました。私にとって身近な自転車でも、人に大けがをさせてしまう可のうせいがあるという意識きを持って運転しようと思います。

## 茨城県下妻市立下妻小学校

四年

菊地きくち

優莉ゆうり

### ただいまを言えるしあわせ

わたしは、登下校中、かならず気をつけていることがあります。それは、横だん歩道をわたるとき、信号が青になっても、車がちゃんと止まっているかを見てからわたることです。

このことを教えてくれたのはお母さんです。ある日、学校の帰り道をいっしょに歩いていたとき、わたしは信号が青になるとすぐに走って行こうとしました。すると、お母さんがわたしの手をぎゅつとにぎって、

「青でも安心しちゃだめ。車がちゃんと止まったかを見てからわたるんだよ。」

と、言いました。そのときは「なんで？」と思いましたが、お母さんはつづけて、

「運転している人が信号を見ていないときもあるし、急いでいる車もあるの。もし車が止まらなかつたらあぶ

ないでしょ。」

と、教えてくれました。それからわたしは、信号が青になってもすぐにはわたらず、左右を見て、車がちゃんと止まったことをたしかめてからわたるようになりました。

ある雨の日のことです。わたしはかさをさして、横だん歩道の前で青になるのを待っていました。青になったとたん、わたしはいつものように左右を見ました。すると、右から来た車がスピードを落とさずに近づいてきました。わたしが止まっていたので、その車はやっとブレーキをかけて止まりました。もし、お母さんの言葉をわすれて走っていたら、ぶつかっていたかもしれせん。

家に帰ると、いつも通りお母さんが、

「おかえり」

と、笑顔でむかえてくれます。しばらくすると、お姉ちゃんも

「ただいま」

と、元気な声で帰ってきます。夜には、お父さんも仕事から帰ってきて

「おつかれさま」

と、声をかけます。そして、四人で食たくをかこみ、

「いただきます」

と、言ってあたたかい夜ごはんを食べます。みんな笑いながら話す時間は、何でもないようで、とても大事な時間です。こんな当たり前の日が、わたしにとって一番のしあわせです。

お母さんが言った「青でも安心しない」という言葉は、わたしのいのちを守ってくれます。そして、それは家族の笑顔を守ることもつながります。これからも、わたしはお母さんの教えを守って、安全に道をわたります。そして、毎日元気に「ただいま」と言って、家族みんなが笑顔でいられるようにしたいです。

交通安全を人任せにしない

「交通安全を人任せにしないこと。」これは、登下校のときに母がくり返し私に言う言葉です。通っている学童保育の前の歩道はとても危険です。車道がせまいため、自転車に乗った人たちが歩道を通ることが多いのです。歩道は「歩く人の道」です。だから、本当は歩行者がいる時には、自転車はおりて通らなければならぬと聞きました。

でも、実際に自転車をおりてくれる人はほとんどいません。歩いていくすぐ横を、スピードを出した自転車がびゅんびゅんと通りすぎていくことがあります。何度もぶつかりそうになって、とてもこわい思いをしています。だから私は、自転車が来たときは立ち止まって、自転車が通りすぎるのを待つようになっています。ルールを守らない人が悪いのはもちろんです。でも、「歩行者が正しいんだから」と自分の行動をかたくなに変えなかった

ら、ぶつかってケガをしてしまうのは自分です。もしも事故にあってしまったら、自分がこわい思いや痛い思いをするだけではありません。家族や友だちも、とても悲しい気持ちになります。だから私は、ルールを守らない人がいる時こそ、自分の安全をしっかり守ることが大切だと思います。

横断歩道をわたる時も、私は信号が青になってもすぐには渡りません。車が止まっているかどうか、きちんと見てからわたるようにしています。母が兄を妊娠していた時、横断歩道の信号が青になったので、すぐに渡ろうとしたことがあったそうです。すると、赤信号に気づかなかった自動車がスピードを落とさずに、目の前を通りすぎていったそうです。あと一秒早く歩き出していたら、自動車にはねられていたかもしれません。その時のことを思い出すと、母は今でも震えてしまうといます。もし母がその時に事故にあっていたら、兄も私もこの世に生まれていなかったかもしれません。そう考えると、交通安全は本当に大切だと感じました。

交通安全を守るためには、交通ルールを守るだけでなく、交通マナーを守ることでも大切です。交通マナーとは、

まわりの人のことを思いやる気持ちです。そして、「誰かが気をつけてくれるから大丈夫」ではなく、自分自身でもまわりの様子をよく見て、安全な行動をすることが大切だと思います。

あせっていると、まわりが見えなくなったり、正しい判断ができなくなったりします。時間にゆとりがあれば、交通ルールをきちんと守ることもできるし、落ち着いて行動することもできます。私は、毎日少し早めに家を出るようにしています。そうすることで、安全に気をつけながら登下校ができるからです。

これからも、交通安全を人任せにせず、自分の目でまわりをよく見て、安全に気をつけて行動していきたいと思っています。そして、私の大切な家族や友だちにも、交通安全の大切さを伝えていきたいです。

## みんなで守ろう自分の命

夏休み、ぼくは初めてのおつかいをしました。何をやるのもお姉ちゃんといっしょが多いので、一人で行くのは初めてでした。お母さんにたのまれて、近くのゆうびん局まで八十五円切手を二まい買いにきました。ゆうびん局は、家から五分ぐらいの所にありますが、交通量が多い国道十一号をわたります。行く時は、とてもきんちようしたけど、ゆうびん局に着くとお店の人にあいさつができ、切手を買うことができました。一人で買えたことがうれしくて外に出た時に切手を見ていると、風がふいてぼくが買った切手は、道の方に飛んでいってしまいました。そして、走ってきたトラックの荷台に乗ってなくなっていました。とうとうとしたけどとれませんでした。くやしい気持ちのまま、レシートだけにぎりしめて家に帰りました。しょんぼりしながら、

「母さん切手買えたけど…。」

とあったことを伝えました。するとお母さんは、

「レシートを見たら切手を買えたことはわかったよ。ありがとう。それよりも飛んだ切手を道路までとりにいこうとせず、くやしい気持ちをおさえて、自分の命を守って帰ってこれたことがうれしいよ。」  
とほめてくれました。

しっぱいに終わったおつかいと思ったけど、お母さんの言葉で心がとてもおちつきました。そして、自分の命を守ることを、いつも気をつけている交通安全について、もう一回家族で考えることができました。

おつかいに行く時は、自転車に乗って行きました。三年生になって自転車に乗れるようになってから、ぼくは遊びに行くときも自転車を使っています。歩くより楽だし速いからです。必ずヘルメットをかぶり左側を走るとき、横たん歩道を渡るときは、一度自転車からおりておして渡ること、信号をよく見るなど自転車に乗るときのルールは、しっかり守るようにしています。今回のおつかいでも、ルールを守れたから、けがなく家に帰れたと思います。テレビのニュースでよく交通事このニュースを見るけど、ちょっとした不注意で、大けがをしたり、

死んでしまうことがあるので、ぼくは車はこわいものだと思います。でも車がないとふべんです。ぼくのやりたい習い事もできないし、買い物もできなくなります。だからぼくたち子どもだけではなく、大人もしっかりルールを守ってほしいです。スマホを見ながら運転したり、お酒を飲んで運転するのはやめてほしいです。だれでも大切な家族がいなくなっても悲しいし、自分の命がなくなってもいやです。大人も子どももルールを守って、一つしかない自分の命を守ることが大切だと感じました。

一人一人が安全に気をつけることで大事な命は守れます。はじめてのおつかいから、交通安全について考えることができたので、ぼくはいいけいけんができた夏休みになったと思います。「いつてきます。」と家を出たら、「ただいま。」とえがおで帰ることが幸せだねと家族で話しました。二期期からも学校の登下校や友達と遊ぶ時など気をつけたいです。

## 香川県観音寺市立観音寺小学校

五年

亀井 かめい

涼井 りょういち

### ぼくならだいじょうぶ

ぼくは、小学三年生のころ、お兄ちゃんとボール遊びをしていた時、ぼくがボールをキャッチできずに道路のほうへ行ってしまった。その時、ぼくは左右確にんせずにボールを取りに行こうとした。すると、「一たん止まれ。左右しっかり確にんしろ。」とお兄ちゃんがぼくに

言ってくれた。そして、ぼくは左右を確にんしようとして右を見たら、自転車がものすごいスピードでぼくの目の前を通りすぎて行った。その時ぼくはこう考えた。もしお兄ちゃんがぼくに左右確にんしろと言ってくれなければ、自転車とぶつかって大けがしていたかも知れない。さらに自転車で乗っていた人にもけがをさせていたかも知れないと思うと、せすじがぞくつとした。道路に飛び出してはいけけない。これは幼稚園の交通安全教室で教わったルールだ。車や自転車はすぐには止まれない。だから、道路に出る前に歩行者は止まって周りに危険がな

いか確にんしなくてははいけけない。それまで「そんなこと分かってるよ。道路に飛び出すわけないじゃん。」と思っていた。だけど、ぼくはお兄ちゃんと遊んでいる時にボールに夢中でこんなかん単なルールを守ることができなかった。そして、もう少しで事故にあうところだった。ぼくはこのけい験で、当たり前だと思っていた交通ルールにもきちんと意味があり、そのルールを守らないと大きな事故になりかねないということ、だれだって事故にあう可能性があるということを学んだ。

小学四年生から自転車に乗ることが多くなってきた。ぼくが自転車で乗る時に気をつけていることは、歩行者がいつ飛び出してきてもすぐに止まれるスピードで走るということ。理由は、歩行者はこないだろうと思って、速いスピードで走っていたら歩行者が出てきたときに事故になってしまうから。ぼくは、歩行者になることも自転車で乗って行動することもある。どっちの時も決められた交通ルールを守ること。それは絶対守ると心に決めている。自分の命を大切にすることが他人の命も大切にするこゝにつながらると思っているから。何をすることも「だから」とは考えずにもしかしたらという意味も込めて「か

も」と予想できないことが起きることも考えるようにしている。でも、無意識に何かに集中していたりすると冷静に考えて行動できないことがあるかもしれない。今回経験したようにボールに夢中で道路に左右確にんせずつびだそうとしたりしてしまいかも知れない。

これからは遊ぶ場所を考えたり、自分はだいたいどうぶだと過信したりしないようにすること。だから、ルールはきちんと守らないといけない。ぼくはそんな気持ちで気を引きしめていこうと思う。そのため約束の時間にはよゆうを持って早めの行動ができるように心がけたい。

## 香川県観音寺市立観音寺小学校

五年

間 渕まがち

羽 海うみ

## 「ながらスマホ」について

わたしは、車に乗っている時に、スマートフォンをそ  
う作しながら歩いている人を見かけました。家に帰って  
から、家族と「ながらスマホ」について話し合いました。

わたしは、

「ながらスマホをしていると信号が赤なのか青なのか  
が分からなくなったり、ふみ切りが鳴っているかが分か  
らなくなったりするので、事故にあうリスクが高くなる  
よね。」

という話をしました。その後お兄ちゃんが、

「確かに、ながらスマホをしなくなったら、事故も少  
なくなるね。」

と言ってくれて、家族みんなが共感してくれたので、と  
てもうれしかったです。その話し合いが終わった時、弟  
が、

「あつ。」

と言ったので、指をさしている方を見ると、「ながらス  
マホ」をしている人がいたので、注意をしようかなやん  
でいると、後ろからお父さんが、

「ながらスマホはダメですよ！」

と大きな声で言ったのでびっくりしました。でも、すぐ  
に注意をしたお父さんを見て、少し誇らしかったです。

次の日、家族でドライブに行っている時、他国の人が、  
自転車に乗りながらスマートフォンをそう作っていて、

「あぶないなあ…」と思つていたら、その人がふみ切りに直進しようとしていました。すると、近くの人が自転車の人を止めてくれました。事故が起きなくてよかったですけれど、すごくひやひやしました。わたしたち家族は、車の中でみんなが、

「あぶない！」

とさげんだ後だったので、ほっとして笑いがおきました。

また次の日に、お母さんが車を運転しながらスマートフォンをそう作っていたので、わたしが、

「ながらスマホしたらいかんよ。」

と言うと、お母さんが

「ああ、ごめん！気をつける。」

と言ったので、「よし分かってくれた。」と思つて、うれしかったです。

ちがう日に、お兄ちゃんが自転車に乗りながらスマートフォンをそう作っていたことをわたしの友だちから言われたので、帰ってからお兄ちゃんに、

「何回言ったら分かるんよ？いいかげんにながらスマホ止めて！」

とわたしが言った後から、わたしの家族の「ながらスマ

ホ」がなくなりました。

最近では、お兄ちゃんが

「おれの家族、マジで、事故とかないんで。」

と自まんするようになりました。「それ、わたしのおかげやで。」と思つておもしろかったです。これからも、家族みんなで「ながらスマホ」に気をつけていきます。そして、家族みんなが笑つてすごしていきたいです。

## 福岡県朝倉市立甘木小学校

六年 手島 琉生

## 交通ルールは命の約束

「行つてきます」と言つて家を出た人が、「ただいま」と帰つてこれない。そんな悲しいニュースをよく目にします。そのたびに胸が痛みます。事故はほんの一瞬で起こり、一度起これば、命を奪つたり、大きなケガを残したりします。私は今、交通安全が「自分の命」だけでなく、「周りの命」を守る行動なのだと強く感じています。

小学校に入学して登校する際、母が毎日「車に気を付けてね」と言っていました。当時の私は、それをただお決まりのセリフだと聞き流していました。しかし成長するにつれて、その言葉の重みが少しずつ分かるようになってきました。

私の家は毎年春になると、交通ルールについて話し合います。私の登校ルートには二つ危険がありました。一つは「相手との死角」です。車の確認が遅れるため、ヒヤッとします。なので車が来ていなくても、左右ちゃんと見て、安全に通っていきます。二つは「横断歩道」です。歩行者優先にも関わらず一時停止しない車を見ると、「行っていたら、大きなケガを負っていた」という危ない場面にも遭遇します。そのため、「車の位置」を正しく確認することと「一時停止をしない場合を想定すること」が大切です。今年はこの身近にある危険について話し合いました。このことはすぐ胸に響きました。

私の中にはどこか「交通ルールは自分には関係ない」と思いこんでいました。でも、家族で話し合ったことで、交通事故はいつ起こっても不思議ではないと思えるようになり、心がけることができるようになりました。

最近では、友達の中に「ヘルメットはダサイ」と言っ  
てかぶらない人がいます。でも私は母の言葉を思い出し  
ます。「命を守る方がずっとかっこいい。」確かにその通  
りだと思いました。命があるから全力で勉強できて、遊  
べて、笑い合える。交通安全は、夢や未来を守る一つの  
行動です。

私はこれからも、家族と話し合った交通ルールを守り  
続けます。そして、ルールを守っていない友達に注意で  
きる人になりたいです。交通安全は一人が取り組むので  
はなく、みんなで守り合うものだからです。

交通ルールを守ることは、命を守ることです。その思  
いを胸に、自分自身の行動を見直しながら、日々大切に  
力強く歩んでいきます。そして、悲しいニュースがなく  
なると信じています。

## 愛媛県松山市立宮前小学校

六年

藤 渕 ふじがち

悠 玄 ゆうげん

### 命を守る心配性

弟がまだ三歳くらいの頃、危うく事故で命を落とすところでした。父が玄関から出かけるのを見て、弟が勝手について行ったのです。玄関のかぎを開けて、門は閉まっ  
てなくて、父を追いかけて門から道路に飛び出した瞬間、  
車がきて急ブレーキをかけました。ものすごい音と共に、  
運転手さんは降りてきて、大声で怒鳴ったそうです。

「俺を犯罪者にする気か！気をつけろ！」

弟はキョトンとして、父はひたすら謝ったそうです。  
あの時の事を話す時、普段は何があっても動じない父が  
こう言いました。

「一生のトラウマになっている。生きていて本当に良  
かった。門を閉めなかったパパが悪い。後ろも確認すべ  
きだった。」

子供はそれまでしなかったことを急にしようになる  
と聞きます。僕はこのことをうつすら覚えていて、父も

母もこの日以来「するかもしれない」意識を持ち、色々  
僕たちに注意するようになりました。だから僕も、強く  
心に残っています。弟が生きているから、こうやって話  
せるけど、「もし…」と考えるだけで僕の心臓はドクド  
クして、息苦しくなります。

母は以前、信号待ち停車中に、斜め後ろから勢いよく  
追突され、むち打ちになり、通院と痛みで不便そうでし  
た。首の痛み、頭痛などで、湿布を貼るのが僕と弟の役  
目になりました。洗濯物を干すのや、洗い物も、首を動  
かさなくていいように僕たちも協力。安全運転で信号待  
ちしていても、ある日突然事故にあうのです。違反して  
いなくても、事故に巻き込まれる恐れがあります。そう  
考えると、道路に出るということは、歩きでも、車でも、  
幸せな日常が、一瞬にしてうばわれることもあるのだと  
怖くなります。普段の生活では、何事も気にし過ぎない  
方が良いと思います。だけど、道路にいる時は、心配性  
な方が良く、「車が突っ込んでくるかも」「青だけど止まっ  
てくれないかも」「僕に気づいていないかも」挙げれば  
たくさん「かも」があつて、慎重に行動したいです。  
心配性になって「青になつてもすぐに渡らず左右を見よ

う」「僕を見つけてもらえよう、渡る時は手を高く上げよう」「通り過ぎるまで広い場所で待とう」そうやって、たくさんの不安を、一つ一つクリアし、一つだけの命を守りたいと考えています。

車もバイクも、歩く人も、自転車も、みんながお互いに気をつけて、何より自分の命は自分で守る、その気持ちを強く持つことで無理をしなくなり、安全への第一歩になると僕は思います。命を他人任せにせず、後悔のないように、後悔させないように、僕は自分を守りたいです。そして、周りの人も守れるように、安全意識を持った大人になりたいと思います。

## 愛媛県松山市立石井北小学校

六年

柳瀬やなせ

新奈にいな

## 失敗から学ぶ防げる事故

小学生の移動手段といえば、ほとんどが自転車です。私も、おばあちゃんが誕生日にプレゼントしてくれた自転車で、友達と遊びに行ったり習い事へ行ったりしています。

そんなある日、当時五年生だった私は、急いで家に帰ろうとしました。右側を走行して、交差点でスピードを落とさないまま右折しました。曲がった先には一時停止している車がいち、私はブレーキをかけることができずに、あっ！と思った時にはもうぶつかっていました。運転手のおじいさんはとても優しく、けがはないか、自転車は壊れていないか、何度も聞いてくれました。車には傷が付いていました。「どうしよう。やつてしまった。」と、私は涙が止まらなくなつて、とても怖かったです。おじいさんは自宅まで付いて来てくれて、母と話をしてくれました。お別れしてからも、電話で心配してくれて

いました。

私の失敗は、左側通行をしなかったことと、カーブミラーを見たり一時停止をしたり、安全を確認しなかったことです。全てできていないといけないことだけど、どれか一つでも守れていれば、事故は起きなかったと思います。今は、これらに気を付けて運転しています。

そしてもう一つ、良くなかったのは自信を持っていたことです。低学年の時より上手に運転ができるようになって、行動のはん囲も広がりました。何でもできるような、お姉さんになったような気持ちがありました。よく「慣れた時に失敗する」という言葉があるように、油断していたなと思います。慎重に、少し疑うような気持ちで運転した方が良いです。「車が飛び出して来るかもしれない」というような、かもしれない運転を心がけて、自分自身に対しても同じように、無理のない運転を選択しなければいけません。急なブレーキをかけずにすむように、スピードを出し過ぎないようにしたり、信号が点滅つしていたら、次の信号を待つようにしたり、対策すれば危険は少なくなります。

交通事故はたくさん原因で起きています。子どもの飛び出しや、高れい者の操作ミスはとも多いです。自分の油断で、だれかを犯罪者にしてしまうかもしれないし、自分の失敗でだれかを殺してしまうかもしれない。それがハンドルのにぎる責任です。

私はその時の事故で死ななかったから、これからの人生で気を付けることができます。運転技術も上がりました。でも、気を付けることは変わりません。何歳になっても、車やバイクに乗るようになって、初心を忘れずに無事故無違反を目指します。

審査を終えて

NPO法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長 宮田 美恵子

小学生の部

令和七年（二〇二五年）の春・秋の全国交通安全運動では、「歩行者の安全確保」、「飲酒運転やながらスマホの根絶」、「自転車の交通ルールの遵守」等が重点として掲げられました。あわせて、自転車の交通安全教育の充実化に向けた官民連携協議会が策定した「自転車交通安全教育ガイドライン」に基づき、幼児から高齢者までの一貫教育を通じて、自転車教育の強化や安全・安心な利用を具体化する施策が推進されています。

こうした背景の中で、今回の小学生の応募作品には、横断歩道の渡り方や反射材の活用、ヘルメット着用、スマホ使用運転の危険性など、日常の気づきを基にしたテーマが多く見られました。子どもたちが生活の中で感じたことを素直に表し、自分や家族、地域の安全を考える姿勢が随所に示されており、交通安全教育の広がりを実感します。

「交通安全ファミリー作文コンクール」は、子どもたちが交通場面を振り返り、家族と安全を考える機会を大切にしています。普段何気なく使う道路に目を向けることで、ヒヤリとした体験や身近な事故、地域の見守り、家族の願いなど多くの気づきが生まれます。それらを言葉にする過程そのものが命を守る学びの時間です。今回も多くの子どもたちがこの機会を得られたことを嬉しく思うとともに、保護者、学校、地域の皆さまのご協力を深く感謝申し上げます。

最優秀作（内閣総理大臣賞）

◇愛媛県二年生・若狭早さん「頭のイナズマ」

事故の瞬間を擬音で立体的に描き出し、読者に衝撃と恐怖を直接体感させる表現力が圧倒的な評価を受けました。ヘルメットが命を守った事実を自身の経験から示し、日常の注意だけでは避けられない危険の存在を強い説得力で伝えていきます。思いがけない事故の現実を鋭く突きつけ、安全行動の重要性を深く刻み込む力をもつ秀逸な作品として高く称賛されました。

優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）

◇埼玉県一年生・森永紗礼さん「とうげこうできをつけること」

登校班や一年生だけの下校、一人歩きで意識している点を具体的に述べ、緊張や不安を抱えながらも、班長や地域の見守りに支えられていることに気づいていきます。こうした経験を通して「自分のことは自分で守る」という意識が育っていく様子が、作品の大きな魅力として受け止められました。

◇大分県二年生・竹山明里さん「わたしが大きくなったらくさんの人をしあわせにしたい」

交通指導員として活動する両親の姿を見て、自らも共に活動するようになった経験を描いています。暑い日も活動を続ける両親への尊敬や、スマホ運転が減ったと感じる周囲の変化に気づく視点が印象的で、将来の願いへとつながる成長が高く評価されました。

◇大阪府三年生・中西広さん「やさしい横だん歩道」

視覚障害のある祖母の横断を助けた体験が出発点です。音声信号の違いを自分で調べ、祖母に伝えながら歩く姿に思いやりが表れています。誰にとっても安全な横断歩道を願う気持ちと主体的な学びが、選考の中で特に光りました。

◇ 群馬県四年生・尾内美玲さん「命を守るジュニアシート」

同年代の子どもの事故をきっかけに、体格に合わないシートベルトの危険性を理解した作品です。「ジュニアシートを早く卒業したい」という気持ちと母の願いを受け止めながら、安全装置の必要性を自分の言葉で伝えようとする姿勢が、説得力のあるメッセージとして評価されました。

◇ 鹿児島県五年生・浦来叶さん「お父さんと行く鶏ふん配達と交通安全」

父のトラックに同乗し、細い道や交差点での判断を体験的に学んだ内容です。運転席と歩行者の両方の視点に気づき、慣れた道でも注意を怠らない大切さを実感した点が、作品の価値を大きく高めています。

◇ 栃木県六年生・前野ちえりさん「登校班の問題児」

妹の危険な行動に悩む中で、母の助言から自分の伝え方を見直すようになった作品です。相手を変える前に自分の姿勢を整えることの大切さに気づき、思いやりをもって伝えることで班の雰囲気が変わっていく過程が、読後に深い余韻を残しました。

優秀作（文部科学大臣賞）

◇ 大阪府五年生・谷青葉さん「大切な人を思い浮かべて」

祖母の転倒事故を通して家族の痛みを自分のこととして受け止め、相手に寄り添いながら安全行動を促した姿勢が高く評価されました。ヘルメットを嫌がる祖母に丁寧に思いを伝え、家族の安全を願う気持ちを共有していく過程が温かく描かれています。また、自身の行動にも「大切な人を思い浮かべる」という視点を取り入れ、思いやりが安全意識を育むことを読者に自然に示した点が印象深い作品となりました。

佳作（警察庁交通局長賞）

◇宮崎県一年生・木村隼輔さん「こどもタヌキのこうつうじこ」

タヌキの事故を自分や弟に重ねて命の重さを考え、その思いを行動に移した点が印象的でした。弟の手を握り、存在を知らせようとした姿勢には家族への思いやりがにじみます。交通安全を自分の問題として捉えた点が高く評価されました。

◇福島県一年生・中里心花さん「あんぜんにあるく」

青信号でも確認を続ける必要性を体験から学び、子どもが見えにくい存在であることを理解した点がよく伝わります。家族に会えなくなるかもしれないという想像を通してルールの意味をつかんだ姿勢が認められました。

◇香川県一年生・山崎椋太さん「ぼくのとうこう」

母の不安の理由を知ったことで危険への理解が深まり、一人登校へ向けて心の準備を進める様子が丁寧に描かれています。周囲を見て立ち止まる習慣も身につき、成長と安全意識が結びついた点が評価の対象となりました。

◇茨城県二年生・染野心暖さん「かぞくでまもるこうつうあんぜん」

横断歩道での体験をきっかけに母の言葉を受け止め直し、家族で決めた約束を守ろうとする姿勢が印象に残ります。姉としての自覚が芽生え、家庭内で安全意識が広がる様子を描いた点が高く評価されました。

◇群馬県二年生・森川莉望さん「こうつうルールをまもろう」

旗振りの人の事故を目の前で見た衝撃から、交通事故の怖さを真剣に考えるようになった心の動きが伝わります。祖母が旗振りを引き継いだ出来事を通して地域の温かさに気づいた点が評価されました。

◇群馬県三年生・岩田博都さん「目線」

助手席からの景色を体験したことで、歩行者・自転車・運転者それぞれの立場や死角の存在に気づいた視点

の変化が際立っています。気づきを行動の見直しにつなげた点が認められました。

◇茨城県三年生・山中颯真さん「安心・安全は一人一人の心がけ」

事故のニュースをきっかけに通学路の工夫や地域の見守りに目を向け、安全を支える要素を整理した点が印象的です。弟に伝えようとする姿勢に責任感が感じられる作品として評価されました。

◇愛知県三年生・早稲田怜さん「私が増がいが者にならないために」

シミュレーター体験を通して見落としやスピードの危険性を理解し、身近な場所にも同じ条件が潜むと気づいた点がよく伝わります。加害者にならないよう行動を改めようとした姿勢が高く評価されました。

◇茨城県四年生・菊地優莉さん「ただいまを言えるしあわせ」

青信号でも車が止まるまで待つという母の教えを体験で確かめ、日常の「ただいま」の尊さに気づいた心の動きが温かく描かれています。安全と日常を結びつけた視点が評価のポイントとなりました。

◇石川県四年生・杉本彩樹さん「交通安全を人任せにしない」

歩道での危険な経験を通して、自分の行動が周囲の安全にも影響することを理解した点が印象的です。母の体験談を受け、安全を自分で守ろうとする意識を高めた姿勢が評価されました。

◇愛媛県四年生・村上央征さん「みんなで守ろう自分の命」

切手を追わず道路に出ない判断を母にほめられ、命を守る行動の価値を実感した様子が素直に描かれています。日常のあいさつの大切さに気づいた点が高く評価されました。

◇香川県五年生・亀井涼市さん「ぼくならだいたいようぶ」

兄の一言で事故を避けられた経験から、基本的な交通ルールの意味を改めて理解した姿が印象に残ります。命を守る行動を選ぼうとする意志が評価されました。

◇香川県五年生・間瀬羽海さん『ながらスマホ』について」

家族で「ながらスマホ」の危険性を共有し、互いに声をかけ合う習慣が生まれた点がよく伝わります。周囲にも目を向けて事故を防ごうとする意識が認められました。

◇福岡県六年生・手島琉生さん「交通ルールは命の約束」

毎年家族で通学路の危険箇所を確認し、ルールを見直す習慣を続けている点に安全への意識の高さが表れています。「命を守る方がカッコいい」という価値観を行動に結びつけた点が評価されました。

◇愛媛県六年生・藤渕悠文さん「命を守る心配性」

弟の飛び出しや自身の事故を振り返り、慎重に行動しようとする決意を言葉にした点が印象的です。青信号でも左右確認を徹底する姿勢が評価されました。

◇愛媛県六年生・柳瀬新奈さん「失敗から学ぶ防げる事故」

自転車事故を原因まで含めて振り返り、相手の思いやりに触れて責任を自覚した心の変化が丁寧に描かれています。失敗から学びを導き出した点が高く評価されました。

以上の受賞作からもわかるように、子どもたちは実体験や身近な人の出来事を通して、それぞれの発達段階に応じながら真剣に交通安全と向き合っていました。自分や周囲の安全を守ろうと意識を高めている姿は、大人にとっても大きな励ましとなるものです。これからも一つひとつの経験を大切に、事故に遭うことなく、子どもたちが健やかに成長していくことを心から願っています。

最後に、本コンクールは、多数の応募作品を丁寧に読み進めてくださった予備審査員の皆さま、事務局ならびに関係者の皆さまのご尽力により開催されました。本審査会において真摯かつ厳正な審査にあたってくださった審査員の皆さまにも、深くお礼を申し上げます。

令和7年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員  
— 小学生の部 —

(敬称略、順不同)

---

宮田美恵子	NPO法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長
羽 藤 雄 次	足立区子どもの安全安心プロジェクトチームリーダー
山口祐美子	全国公立小・中学校女性校長会会長
入 谷 誠	一般財団法人全日本交通安全協会専務理事
幸 田 徳 之	一般財団法人日本交通安全教育普及協会専務理事
山 崎 律 子	内閣府政策統括官(共生・共助担当)付参事官(交通安全対策担当)
中 園 和 貴	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
井 澤 和 生	警察庁交通局交通企画課長

# 中学生の部





## 最優秀作

内閣総理大臣賞

### 福島県いわき市立小名浜第二中学校

三年

鈴木<sup>すずき</sup>

彩花<sup>あやか</sup>

### 家族でつなぐ交通安全の輪

ある日の夕方、私は自転車で家に帰る途中、信号が青に変わったので横断歩道に進もうとしました。そのとき、右から来た車が急にスピードを上げて曲がってきました。ブレーキを強くかけ、なんとか止まりましたが、もし一歩でも進んでいたらと思うと、背中が「ゾッ」としました。たった数秒の判断で、命が守れるかどうかが決まることを、身をもって感じた瞬間でした。

その数日後、学校で交通安全教室が行われました。映像では、反射材をつけた人とつけていない人の見え方の違いが映し出され、夜道では本当に姿が見えにくいことがわかりました。また、事故に遭った人の体験談を聞き、

「自分は大丈夫」と思う油断が一番危険だと知りました。授業が終わる頃には、この学びを家族にも伝えたいという気持ちでいっぱいになっていました。

家に帰ってから、夕食の席でその日の授業のことを話しました。私の話を聞いた父は、「確かに車を運転しているとき、夜は歩行者が見えづらい」と言いました。母は「スマホを見ながら歩いたり、自転車に乗ったりする人も多いね」と心配そうに話しました。姉も「横断歩道では、車が完全に止まってから渡った方がいいよ」とアドバイスをくれました。家族みんなで意見を出し合い、私たちの交通安全ルールをつくることになりました。

まず、道路を渡るときは左右を二回ずつ見ることで、信号が青でも、車が止まったのを確認してから渡ること。自転車では必ずヘルメットをかぶり、夜はライトを早めにつけること。さらに、夜道では暗い服ではなく明るい色の服や反射材を身につけること。ルールはシンプルですが、どれも事故を防ぐために大切なことばかりです。

話し合い後、私たちはすぐに行動を始めました。父は自転車のライトをLEDに交換し、母は買い物バッグに

反射材をつけました。姉たちは通勤用のバッグに光るキーホルダーをつけ、夜でも目立つようにしました。私は塾の帰り道に黄色い反射ベストを着るようになりました。最初は少し恥ずかしかったけれど、車のライトが当たるとしっかりと反射しているのを見ると「これで自分の命を守る」と思えるようになりました。

交通安全は、一人ひとりの意識と行動の積み重ねです。家族で話し合いをしたことで、私は「守られている」だけでなく、「自分で守る」大切さを知りました。事故は予告なく訪れます。だからこそ、日ごろから安全を意識し、行動に移す必要があります。

これからも家族とともに交通安全を心がけ、学校や友達にも学んだことを伝えていきたいです。そして、地域全体が安心して暮らせるよう、小さな輪を広げていくことが私の目標です。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

## 愛媛県松山市立南中学校

一年

大脇<sup>おおわき</sup>

理緒<sup>りお</sup>

## 後悔の前に行けること

私が小学年の時、祖父が交通事故にあった。母から事故のことを聞いた時、私がまず一番に考えたのは、祖父が今どこにいるのかということだ。私の心臓はドキドキし、不安と恐怖でたまらなかった。おそろおそろ母にたずねると、

「じいじは、病院にいるよ。大丈夫。」

全身を強く打ったけれど、ヘルメットのおかげで助かったらしい。ヘルメットがなかったらと思うと、頭がまっ白になってしまった。

どのような事故だったかというところ、信号のない交差点を自転車で直進していた祖父に、左から直進してきた車

がぶつかっただけだ。車が走行していた道路に一時停止の線があったにもかかわらず、車は一時停止しなかったため事故がおきたそうだ。私はその話を聞いて、疑問に思うことがあった。それは、車の運転手も自転車で乗っていた祖父も左右の確認をしなかったのか、ということだ。事故があった場所に連れて行ってもらったのだが、とても見晴らしのよい交差点だった。車も自転車もお互いに気付けたはずなのに。

防ぎようのない事故もあるかもしれないけれど、防げない事故も多いのではないかと思う。今回の事故だって、車がきちんと一時停止し、左右の確認をしていれば、事故はおきていない。祖父が走行していた道路が優先道路だったとしても、速度をゆるめない車を確認できたなら、自分が止まれば助かっていた。もしかしたら、車が一時停止するはずだと、祖父は直進したのかもしれない。交通ルールを守るのは当然のことだけれど「だろう」「はずだ」そんな勝手な思い込みや決めつけが事故につながるのだと思う。「かもしれない」そんな気持ちをもみんなが持てば、防げるはずの事故はゼロになるのではないだろうか。

この事故で、改めてヘルメットの大切さを感じている。祖父のヘルメットは割れて、自転車は曲がってしまったけれど、祖父は奇跡的に助かった。割れたのはヘルメットだったけど、もしかぶっていないければ、割れていたのは何だったのか。私は自転車に乗る時、ヘルメットをかぶってアゴひもをしめていないことがあったのを、深く反省している。正しくヘルメットを着用しなければ意味がないのだ。

命を守るために、できることはたくさんある。ヘルメットもそうだが、早めにライトをつけるようにしている。母と車に乗っていた時、無灯火の自転車や歩行者にはあったことがあり、自分の存在に気付いてもらうためにも、カバンには反射板のキーホルダーをつけて、早めのライトを心がけている。さらに、青信号で横断歩道を渡る時も、必ず左右の確認をしている。後悔をする前にできることはできる限り実行し続けたい。事故にあつてからでは、取り返しがつかないのだから。

宮崎県延岡市立南浦中学校

学びの多様化学校分教室「熊野江教室」

二年 小田原<sup>おだわら</sup> みろく

右、左、右っ!!

「右、左、右っ！よく見て、よし進め！」祖父と一緒に散歩する時に必ず言われた言葉だ。私が幼い頃から優しく大好きな祖父とよく近所を散歩をした。いつも散歩する時は私の手を力強くギュッと握りしめていつもの優しい祖父の顔と違って真剣で少し怖いぐらいの表情で歩く祖父との散歩は決して和やかな感じではなくどこかピリツとした緊張が漂っていた。特に横断歩道の前に来ると「右、左、右っ！しっかり見て！」と大きな声で言われ、「手を上げて！」と手を上に引かれてしまう。そして大きなトラックが近くを通る度に痛いくらい私の手を握りしめて立ち止まってしまう。この祖父の行動が不思議で仕方なかった。

私が小学校高学年になると散歩する機会も減りたまに誘われても理由をつけては断っていた。そんなある日、

親に言われ嫌々ながらも久しぶりに一緒に散歩した時のこと、近所の横断歩道の前で「右、左、右ッ、しっかり見てね！」といったもの大きな声で言われ私は思わず「分かっている！大丈夫だから！」とつい言い返してしまった。祖父の顔を見るのも怖くて何も話さず二人で家に帰った。

そんな祖父が今年の四月に五年間の闘病の末亡くなった。日に日に弱くなつて呼吸も難しい中、祖父が私に「みるくは良い子じゃ、また散歩しような」と私の手を弱々しい力で握りながら言った。「うん」と私は答えるのが精一杯だった。それが祖父との最期の会話になった。大きな悲しみの中、葬儀も終わり仏だんにつこり笑う祖父の写真が置かれた。その隣に小さな女の子の写真が並べられた。その写真の存在は以前から知っていたが気にも留めていなかった。思いきって父に尋ねてみると父の妹つまり祖父の長女和子さんの写真だと教えてくれた。和子さんは二才半の頃近所の横断歩道を歩行中に進入してきた大きなトラックの車輪に巻き込まれ亡くなったと和子さんの写真を見ながら父が話してくれた。その話を聞いたとたん、私の心の中で祖父のあの「右、左、右ッ！」

という大きな声がよみ返り大きなトラックが近くを通る度に立ち止まっていた行動の意味が分かった気がして涙がポロポロと止まらなくなった。そして「じいちゃん、ごめんね」と写真の中で笑う祖父に心から謝った。なぜ祖父はその話を私にしてくれなかったのだろう。もしかすると、祖父の中で四十八年経っても和子さんの死を受け入れられずにいたのかもしれない。私と和子さんを重ね合わせていたのかもしれない。

「右、左、右ッ！よく見て！よし進め！」

祖父の声が私の中で響く。

「うん。気をつけるね、じいちゃん。大好きだよ、じいちゃん。」

三年 金子<sup>かねこ</sup> 由奈<sup>ゆな</sup>

## 守りたいもの

私が学校から帰る途中、小さい子が横断歩道の無い道路を渡ろうとしていました。そこは車の通りが多く、一人で渡るにはとても危険なので、その子に話しかけました。「何しているの？ここは危ないからあっちの横断歩道渡ろうよ。」と私が言うと、その子はすぐに受け入れてくれました。渡ろうとしていた理由を聞いてみると「友達と会うために急いでいて、前にお母さんと一緒にあそこを渡ったことがあったから。」と書いていました。私は「急いでいてもこの道は車が多くて危ないから、こっちの横断歩道まで来た方がいいよ。」と伝えました。無事に横断歩道を渡り、別れる時には笑顔で手を振ってくれました。あの子は一番身近な母親と渡ったことがあるから、一人でも大丈夫だと思ったのでしょうか。私も先生や両親、自分より年上の人がやっていたらやっていいものだと思うかもしれません。あの子が気付かずに渡って

いたらどうなっていたか分かりません。子供は大人を見て学び、成長します。私達は小さな命、笑顔を守るために、自分達の行動一つ一つがお手本となるように責任を持たなければなりません。私はこの件をきっかけに交通ルールについてよく学ぼうと思いました。

私がすぐに思いつく交通ルールは「信号を守る」「ヘルメット着用」「ながら運転禁止」というものですが、調べてみると意外なものも多くありました。例えば「横断歩道で歩行者が待つていたらどんな理由でも車は譲らなければならぬ」というものです。歩行者側の私は横断歩道で待つ時、急いでない時は車に譲ることがあったが、運転手側に迷惑をかける可能性があったのだと気付きました。交通ルールには一つ一つ理由があり、その理由について一人一人が理解することでより多くの人が交通ルールを守るようになるのではないかと思います。

今回考えたことを家族と共有しました。自分だけが気を付けていても他の人が気を付けていなければ意味ないという意見が出て、自分の身は自分で守る力も必要だと気付きました。私にもできることとして、道を渡る時には左右を確認し手を挙げる、夜や雨の日などの暗くなる

時には自転車のライトをつけるなどがあります。自分自身で事故を防止することは、事故を起こさずに済む相手のためにもなるので、相手への思いやりの心で取り組んでいきたいです。

今回、交通ルールについて自分で考え、家族で共有し話し合ったことで、より考えを深めることができました。これからも私は自分の行動に責任を持ち、お手本となるような行動をすることを心掛け、交通ルールをしっかり理解し、守っていききたいと思います。みんなが事故にあわず、笑顔でいられるような世界になることを願っています。

優秀作

文部科学大臣賞

埼玉県越谷市立北中学校

二年

岩館 いわだて

璃沙 りさ

## 交通マナーの大切さ

私の家は道路をはさんで目の前に小学校の通用門があります。児童のみなさんが使う登校門は別の方向にあります。通用門のすぐそばの学校の敷地の中に学童保育所があります。私自身が卒業した母校であり、小学校四年生までお世話になった学童保育所です。

中学生になってから、学校からの下校時間に家の前の道路に何台も車がとまっているのをよくみかけるようになりました。家の前の道路は歩道のない道路なので、路上駐車している車があると、それをよけて通り抜ける車がいるので、歩行者が車とぶつかりそうになっているところをみかけたことがあります。私自身も危ないと感じ

た経験があります。全ての道路に歩道があれば良いと思  
い、調べてみましたが、そのような道路を作るには広い  
土地と費用が必要で実現することは難しい状況のよう  
です。家の前の道路には路側帯という白線で区別され  
部分もないので歩行者と運転者がそれぞれ気をつける  
しかないと思います。道路に何台も車がとまっている  
ことを両親に話すと、学童保育所にお迎えに来る保護  
者の車が路上駐車しているのだとわかりました。

私に通っていた数年前までは車のお迎えは禁止され  
ていました。私も学童に通っていたのでわかるのですが、  
お迎えは短い時間で終わるものではありません。親が  
迎えに来て教室に顔を見せてくれるから帰る支度を始  
めるし、その間に必ず学童の先生はその日の様子を親  
に話していました。トラブルがあったり、心配なことが  
あれば先生と親の話は長くなるし、帰り支度が遅い子  
もいます。その間ずっと車が路上駐車されているのだ  
としたら狭い道路で交通渋滞になってしまうのも想像  
できます。

兄や姉も一緒に路上駐車車の状況を家族で情報共有  
しようという話してみると、家族みんなが危険な場面  
を目にしていることに私はとてもおどろいてしまいま

た。

例えば、路上駐車車の車列のすき間から子供が対  
向車線側に停車している自分の家の車にダッシュで  
飛び出してきたり、車列から子供を乗せたと思われ  
る車がいきおいよく飛び出して急な進路変更をして  
いることなどです。宅配便のトラックや福祉施設  
の送迎車もまきこまれてしまっているそうです。

家族で話したことを両親が学童保育所に路上駐車  
の対策をしてほしいと伝えることになりました。その  
結果、次の週には学童保育所と市役所で対策をして  
くれて、路上駐車禁止の看板を学校の門の所など  
数ヶ所に貼っていました。路上駐車車の車も見  
かけなくなりホッとしていました。

学童保育所の小学生たちはもちろん誰も交通事  
故にあつてほしくはありません。車でお迎えに  
来る保護者の人にも事情があるのかもしれませんが、  
私たち子供は親の行動すべてから学んでいる  
ことを忘れないでほしいです。迷惑駐車になる  
場所を理解して一人ひとりが心がけることが  
大切だと思います。私も交通マナーの意識を  
高めて過ごしていきたいです。

佳作

警察庁交通局長賞

## 愛知県東栄町立東栄中学校

一年

伊藤

新太

### お互いに気をつけないとね

僕の住む地域には日帰り温泉があります。この温泉は地元の人にも人気ですが、たくさん観光客も訪れます。そして、その前の道路は通行量の多い道路で、僕の通学路です。

この温泉の道路に面している駐車場の出入口は、入口と出口に分けられています。このことは駐車場の案内、マナーやルールとして、地元民はわかっているのですが、観光客は看板や路面の表示に気づかず、出口と入口を間違えることがよくあります。

小学校五年生のときのことです。自転車に乗って先に行く友達を追いかけていた僕は、「ブツ、プワー！」と

突然大きなクラクションを鳴らされました。その車は温泉の入口から急に出てきたのです。僕は心臓がバクバクして体がふるえました。安全をよく確かめなかった自分もいけなかったけれど、僕は入口から出てくるなんてあり得ない、危ないじゃないかと思いました。

中学生になってからも、同じ場所で危険な目にありました。部活動を終えて帰宅する途中のことでした。またもや入口から勢いよく出てきた車にはねられそうになったのです。疲れていて注意散漫になっていた僕自身も悪いけれど、入口から出てくるなんておかしいと腹立たしく思いました。

帰宅した僕は、このことを母に怒り気味の口調で話しました。母は穏やかに語りました。

「事故にならなくて、けがをしなくて、本当によかったです。相手の人は観光客の人でしょう。温泉の出入口のマナーやルールもよく知らないだろうし、土地勘がなくて左右どちらに曲がるか考えて集中力がなくなっていたかも知ね。道路を走っている車にだけ目が行って、通行人に気づかないこともあるのよ。お互いに気をつけないとね。」

僕は母の言葉を聞いてはっとしました。僕は出入口を

## いつか自分に返ってくる運転

間違えた運転手の責任にばかり意識が向いていました。母の「お互いに気をつけないとね。」という言葉が心にすっと入ってきました。僕自身も安全に十分気をつけなければと強く思いました。それからの僕は、周囲の安全をよく見極め、運転手がこちらを目視しているかということなども確認して、落ち着いて安全に横切るようになりました。

僕の場合は幸い大事には至りませんでした。一つ間違えれば交通事故になって大けがをしていたかもしれない。事故の多くは、お互いの安全確認や心のゆとりで防げると僕は考えます。運転手は時間に余裕をもって安全運転に努め、土地勘のない地域では、より一層細心の注意を払うようにしてもらいたいと思います。そして、僕自身も慣れている道路であっても油断することなく、常に交通安全を心がけます。このようにして、交通事故の少ない安全な町、地元民だけでなく、観光客からも愛される町にしていきたいです。

「忙しいときほど、人に優しい運転をしなきゃね。いつか自分に返ってくるから。」

ある日、母のこの言葉が、私の心に深く残りました。私はその日、母と一緒に少し急いで目的地へ向かっていました。時計を見ると、予定にはあまり余裕がありません。ところが母は、横断歩道の手前で車を静かに止め、歩行者に「お先にどうぞ」と手で合図を送っていたのです。「どうして急いでいるのに停まるの」と私が尋ねると、母は笑顔でそう答えました。その瞬間、私はハッと、何か大切なことを教わった気がしました。

毎朝、学校に向かう道で、私は歩道のすぐ横を車が勢いよく通り過ぎていくのを目にします。雨の日には水しぶきが上がることもあり、少し怖いと感ずることもあります。「大人はみんな忙しいんだな」と思う一方で、横断歩道で私たちが渡り終えるまで笑顔で待ってくれるド

ライバーもいます。そのような人には自然と会釈やお礼をしたくなり、心が温かくなります。逆に、険しい顔で待つドライバーには、邪魔者扱いされたようで残念な気持ちになります。同じ「待つ」という行動でも、表情や心の余裕によって受け取る印象はまったく違うのだと気づきました。

最近のニュースで、私の住む愛媛県が人口十万人あたりの交通事故死者数二・四三人で全国ワーストになったことを知りました。とても残念で、悲しい現実です。原因は様々ですが、私の経験からは「時間や心に余裕のない運転」が事故を招く一因ではないかと感じます。ほんの数分の遅れを気にして焦るよりも、安全で思いやりのある運転を選ぶ方が、きつと多くの命を守るはずです。

私は中学生で、世の中を大きく変えるような力はありません。しかし、家族の中から始められることはたくさんあります。たとえば、父や母に送迎してもらった時は、余裕を持った出発時間をあらかじめ決め、それを守るようにしています。前日のうちに必要な荷物をそろえ、朝の支度をスムーズに済ませるのもその一つです。また、

「安全で思いやりのある運転をしてね」と声をかけることも欠かしません。こうした小さな積み重ねが、家族の意識を少しずつ変えるきっかけになると信じています。

私自身も、横断歩道を渡る際には、止まってくれたドライバーに笑顔でお辞儀をします。ほんの数秒の行動ですが、相手の気持ちを和ませ、次も誰かに優しくしようという気持ちを生むかもしれません。そして、その優しさがまた別の人の安全運転につながり、やがて地域全体の交通安全の輪が広がることを願っています。

母の「いつか自分に返ってくる」という言葉を胸に、これからも時間と心に余裕を持ち、感謝を忘れずに過ごしていきたいと思います。

交通事故から学んだこと

その日は、とても寒い日でした。いつも通っている大きな道で、右折の信号が青になるのを待っていました。青になったので母の運転する車がゆっくり曲がり始めました。そのとき、対向車が全く止まる気配もない様子で直進してきました。私と母の前にあるエアバックが飛び出すほどの、大きな衝撃がありました。

突然の出来事に、私も姉も何が起きたか分からなかったほどでした。この事故のせいで大きな道は一時通行止めになりました。寒い中で震えながらレッカー車が来るのを待ったり、警察の方と話をしたりしました。相手の方も、とても動揺しているようでした。

私は、毎朝、祖父母の家がある高岡市まで車で通っています。私の住む富山市から、車で四十分かかります。この生活は、姉が保育園に通い始めてから続いているので、今年で十五年になります。車を運転している母は、

子供を乗せていることもあるので、安全にとっても気を付けているそうです。それでも、大きな事故にあってしまったのです。

母がいつも安全運転をしてくれるので、私も姉も安心して過ごしていました。おしゃべりをしたり、時には眠ったり……。自分たちが事故にあうなんて、考えたこともありませんでした。でも、事故は起こったのです。私は、事故はいつ起こるか本当に分からないものだということを強く感じました。

今回の事故は、すべて相手の運転が原因で起こったことでした。けがもたいしたことはありませんでした。それでも、母は、

「大きなけがや、命を落とすようなことにならなくて、よかった……。」

と、今まで見たことがないくらいひどく落ち込んでいた顔が心に残っています。

今回は、被害者という立場でしたが、事故の加害者にもなる可能性があることを忘れてはいけません。相手の方は、二十代の女性の看護師でした。その日は、少し急いでいて信号が赤に変わったことに気付かずに、交差点

## 栃木県星の杜中学校

二年 青木 心音

### ルールを守る人を増やすために

に入ってしまったそうです。私たちから見てもかわいそうになるくらいつらそうで今にも泣きだしそうな表情でした。そんな状態で警察の人や会社の人と話をしていました。何日かたつてから、相手の女性は家族と一緒に私たちの家まで謝りに来られました。その後、母たちと話をしました。母は、

「今回は被害者だったけど、加害者にもなりうるよね。自転車に乗っていれば中学生も加害者になることもあるよ。気を付けようね。」

と言いました。

交通事故は、本当に他人事ではないということを肝に銘じたいと思います。歩いているときも、自転車に乗るときも、気を付けようと思います。交通事故などという怖い目に二度とあいたくありません。あの事故と事故から学んだことを忘れないでいきたいです。

私はとても臆病だ。よく言えば慎重だといえる。日頃からこの性格が災いして、何をすることも遅いと言われることが多い。

どれくらい臆病かというと…。信号のない横断歩道では、車が見えれば、絶対に渡れるであろう距離でも、怖くて渡らない。なのでせっかく横断歩道の前で車が止まってくれた時も、どうぞと身振りで伝えてしまうのだ。母と一緒に歩く時は、母が渡つても立ち止まってしまう。

「大丈夫だから、早く渡りなさい!」

と言われたり、場合によっては手を引かれたりすることもある。中学二年生にもなつてと言われるかもしれないが、距離感がつかめないというのは本当に恐怖しかないのである。

それもこれも、世の中がたくさんの情報であふれているからだ。交通事故のニュースをよく見るが、子どもの

それは、自分が気を付けてもどうしようもないものばかりだ。そんなニュースを見るたびに怖くて仕方ない。

ある日、そんな私を見て、母が言った。

「いつも、車が止まってくれても渡らないでしょう？  
そこまでする必要はないと思うよ。」

必要ないとはどういうことか。車に先に通り過ぎてもらうのだから、むしろ安全なのではと思った。しかし、車を運転する母の意見は違った。ドライバーは渡る人がいれば止まって当たり前。だから止まってくれた時は素直に渡っていい。というものだった。それでも私は母の意見に賛同できなかった。なぜなら、皆が止まってくれるわけではないからだ。横断歩道の前で立っていても止まってくれない車の方が多い気さえする。そのことを母に意見すると、残念ながら現状では、止まってくれるドライバーばかりではない。しかし止まってくれる人は交通ルールを守れている人であり、一礼して横断することで、交通ルールを守る人を増やすことにつながるというのだ。納得できずにその時の話し合いは終わった。

ある日いつもの様に止まってくれた車に先に行ってもらおうと手振りをすると、再度渡るように手振りを返さ

れた。おそろおそろ渡ってみると反対車線の車も止まってくれた。再び会釈をすると、ドライバーの方々は笑顔でうなずいてくれた。母の言葉に初めて納得した。私だけでなく、止まってくれた人たちも皆、気持ちがぴんとした気がしたからだ。このような気持ちの良い思いをすれば、交通ルールを守る気になるのではないか。

再度母と話した。車が止まった時は注意しつつ渡ることにしたと。お互いが気持ちよかったと。母は言った。感謝の気持ちや相手を思いやる気持ちが交通ルールを守ることに繋がると。今では母の言葉の意味が分かる。何度も親子で話し合った「交通ルール」はほんの少しの感謝で、皆が気持ちよくなり、ルールを守る人を増やすことにつながることを実践していきたい。

## 宮城県仙台二華中学校

二年

高石 たかいし

孝樹 こうじゅ

### ほんの少しの意識で

「ドン」という音が横から鳴ったとき、僕の体は地面に倒れていた。一回、ほんの一回でも確認していたらぶつからなかったのかもしれない。そう考えていると胸が痛くなった。

小学五年生の夏、その日は夏休み前最後の登校日だった。いつも通りの時間に起き、慣れた手つきで身支度を整えていた。いつもと違ふところをあげるなら、四時間授業が終わった後に友達の家で一緒に遊ぶ約束をしていた。そして、これからしばらくの間、毎日のように会えなくなるクラスメイトと話す最後の一日だった。慣れた手つきで整えているように見えて、内心ワクワクしていた。

「今日はいつともより早く行くこう。」

僕は急ぎ足で家を出た。僕の家は、通路から道に出るときに、両側に石垣があるため、見晴らしが悪く、注意

してから行かなければ危なかった。だが、注意力よりも気持ちの高揚の方が高まり、右も左も確認せずに僕は飛び出した。そのときだった。自分の真横から強い音がきこえたときには、その場に倒れていた。自転車とぶつかった。あまりの出来事に声が出なかった。どうして周りを確認しなかった。確認していたらこんなことは起きなかった。そう考えていると全身の痛みよりも自分の不注意に胸が痛くなった。起き上がったときにはすでに運転者は去っていた。

学校が終わり家に着いた。そのときにはほとんど治っていたが、念のため友達との遊びを断り、家で安静にしていた。帰ってきてすぐ、母に今朝あった出来事を伝えた。母は非常に驚き、少し悲しい顔をした。夏休みのしおりに書かれていた「夏休み中はケガなく、事故なく生活しよう」という言葉を思い出した。今後に残る大きなけがや命にかかわることが起きていたかもしれないかったのだと思うと、自分の不注意で周りの人を心配させてしまったと反省した。

その夜、家族全員が揃ったところに「この家の交通安全のルールを家族全員で話しあいたい。」と言った。自分

笑顔の未来へ やさしく運転を

の身にあったこと、それから考えたことを真剣に伝えると全員がやる気になって協力してくれた。全員で意見を出しあい、僕の家での交通安全ルールとして、「ヨナトミカ」という標語を作った。ヨは、よそ見をしない。ナは、何度も。トは、止まる。ミは、目で見る。カは、もう一度確認する。これは被害者側も加害者側もどちらも必要なことだ。当たり前のことだが、欠けてしまうと事故につながる恐れがある。ルールの重要性を深く感じた。

交通安全ルールは事故を防ぐうえで大切なことである。しかし、事故をなくすには一人だけが守るのではなく、全員が守らなければ成立しない。どちらかが守っていても、もう一方がないがしろになっていると事故が起きてしまう。あのときは注意が足りなく、事故につながってしまった。歩行者も運転者も注意をする。ほんの少しでお互いが意識するだけで事故は減らせる。このほんの少しの意識が広がり、社会が安心安全に生活できることを心から願う。

中学生になって助手席に座ることを両親から許されるようになる。車内から見える景色が変わった。目の前の横断歩道をお母さんと手を繋ぎぴよんぴよん飛び跳ねながら渡る子。片手をピンと上げて渡る子。その可愛さに笑みがこぼれてしまう。横断歩道での幼い日の私も、車に乗る大人たちの目にはこんな風に映っていたのだろうか。

この夏、私は二週間で二度も交通事故を目撃した。一件は自動車と自動車、もう一件は自動車とバイクの衝突事故だった。いずれも歩行者は巻き込まれなかったが、目のあたりにした光景がショックで食欲がなくなったり、あの時の大きな衝突音がしばらく耳から離れなかった。交通事故は、当事者やその家族・友人はもちろんだけれど、目撃者の心をも大きく傷つけるのだと知った夏だった。

どうして交通事故が起こってしまうのか、運転免許を持つている大人に聞いてみたら、みな「運転中に病気の発作等で不運にも事故が起きてしまうこともあるけれど、多くの場合、ほんの一瞬の気の緩みが原因なのではないかな」と言う。ならば技術に期待するしかないのかもしれない。いずれすべての車が完全自動運転になる日が来ると言われているが、「運転者状態検知センサー」のようなものも開発してはどうか。運転中に眠気が襲ってくることで、疲労困憊の時だつてあるだろう。センサーで運転者の疲労・睡魔・イライラを検知したら、車両をゆっくり停止させて運転を継続できない状態にし、おすすめのリラックスマイोजックを自動的に流すなど、運転者の状態を客観的に判断し早めに運転を停止させる機能が車にあつたら、「自分は現在運転には不適切な状態である」という自覚がない運転者に休息を促せるのではないか。

また、運転免許証をスキャンしないとエンジンがかからないようにした上で、急加速や急減速、スマホ使用等を含めた運転中の道路交通法遵守状況を車が検知・記録し、減点する制度にしたらどうだろうか。高い点を維持

している人にはガソリン代や駐車場代が値引きになる等メリットがあり、減点が多い人には罰金や研修を義務付けたら、みな、今よりも注意深く運転するのではないだろうか。

とはいえ、プライバシーの問題や駐車増加による道路の混乱等の問題を考えると、これらの案は現実的ではないだろう。期待を込めたアイデアは尽きないが、交通事故の悲惨さを伝え、標識などで運転者に注意喚起を促していく地道な積み重ねこそが、現段階においては交通事故を減らすための最善策だと思う。テクノロジーは現在進行形で進歩しているが、今この瞬間も日本全国で横断歩道を築きそうに渡っているであろう何千何万の子どものたちの笑顔を守るのは、ほかでもない、運転者一人ひとりの「心」なのだ。

「お母さんが小さいときは、交通事故がたくさんあったのよ。」

私が想像する未来、横断歩道を楽しそうに渡るわが子に私はこう話している。それを聞いた子どもはこう言うだろう。

「でも今は、車も人もみんなニコニコだね。」

三年 吉田よしだ 爽帆さほ

合言葉は「左右オーライ」

「これを見ると元気がわくのよ。」と言う母の視線の先には、母を元気づけようと歌って踊っている幼い私たち姉妹と足がギブスで固定された母の姿がありました。母がバイクを運転中に事故にあい、手術した時のことです。「消防署の前で事故にあつたから、救急車を呼ばなくても来たのよ。」と笑って話す母の足元をふと見ると、その時の傷が今でも痛々しく残っていて、胸が締めつけられます。傷の部分を机にぶつけた時にはとても痛がり、「他の所より痛みを感じやすいの。」と顔をしかめる母を見て、私もさすってあげたものでした。

小学六年生の時、私も自転車事故にありました。横断歩道を青信号で渡っていた際、信号無視をしてきた自転車とぶつかりました。けがは大したことなく、不幸中の幸いでしたが、自転車の前輪が曲がってしまい、動かなくなりまして。あつという間に自転車が壊れてしまう衝

撃に、とても怖く感じました。交通事故はニュースの出来事だと思っていたのに、自分も当事者となり、あぜんとしました。思い返してみると、警察署の前にある交通事故数を表す表示板にも毎日数件起きていることが示されていました。自分もまたいつか被害者、もしかしたら加害者にもなってしまうかもしれないと思い、ぞつとしました。

私と母の事故の体験から、交通ルールを守っているだけでは事故は防げないとわかりました。私の事故は、青信号だったので、左右の確認をよくしなかつたことも要因の一つだと思います。小学校の時の交通安全教室で、青信号になつてもすぐに渡らず、左右の確認をすることが大切という教えがあつたことの意味を痛感しました。母が運転する車に父が助手席で同乗していると、交差点でよく、「左オーライ」と言います。どうせ母も確認するからむだだなど思つたのですが、「お母さんからは見えない部分があるし、たくさん目で見ただ方が安全だからね。」と父は満足気に話しました。運転席からは見えない死角があることを知り、私も「死角減らし大作戦」を決行するにしました。車に同乗する時は、交差点

や発進する際、私も一緒に安全確認をし、「左オーライ」や、「自転車が出てくるよ。」などと、母に伝えます。やっていくうちに、なんだか私も運転手になった気分、視野が広くなり、今まで気にならなかったことが気になるようになりました。自転車が後ろを確認せずに急に横断してくることも、道路に駐車している車の前から人が飛び出すこと、バイクが車の横をすり抜けることなど、気を配っていても見逃しそうなことがたくさんありました。「運転は片足しか使わないから体は楽だけど、神経は疲れるのよ。」と話す母の気持ちも少しだけわかりました。

一番大切なことは、左右の確認。自分が歩行者の時はもちろん、同乗している時も一緒に確認します。合言葉は「左右オーライ」。左右の安全確認をし、警察署前の表示板に交通事故数ゼロが並びますように。

## 審査を終えて

千葉大学名誉教授 鈴木 春男

### 中学生の部

本年は第十二次交通安全基本計画の始まる年です。前回の交通安全基本計画では、令和七年までに交通事故死者数を二千人以下にするという目標は達成されませんでした。確実に死者数は減少してきています。これは官民が多方面から連携して取り組んでいる交通事故防止対策のすばらしい成果だと考えられます。しかし他方で、年間二千人以上の方々が悲惨な交通事故で亡くなっていることにも注目すべきで、そうした悲惨な事故を無くすためには国民一人一人が自ら進んで交通安全を守ろうとする自発的な行動が不可欠です。

交通安全ファミリー作文コンクール「中学生の部」は、そうした自発的な交通安全行動を動機付ける貴重な場である「家庭・学校・地域」の中で、重要な役割を演じてもらわなければならない中学生の意見が伝えられ、本人はもちろん多くの方々に交通安全の重要さに気付いてもらう大事な事業です。今回もそうした事業にご協力いただいたご本人はもちろん、ご父母、ご指導いただいた先生方、またそれぞれの学校ならびに関係者の方々に心からの感謝を申し上げます。

本年度、残念なのは、応募数が昨年より減少したことです。具体的には、本年度の応募総数は二千四百八十七点（中学一年生・九百八十七点、二年生・八百三十九点、三年生・六百二十点、学年不明四十一點）で、前年度の応募総数三千三百七点に比べて四分の一ほど減っています。応募作品は、学校を通じて提出されるケースが多いのですが、中学生の間でもネットが普及し、長い文章を書く機会が少なくなってい

ることの反映かも知れません。しかし多くの中学生がどうしたら交通安全が守られるかを一生懸命考え、作文としてまとめることは、何よりも自分自身を交通安全に向けて動機付ける結果となり、学校における交通安全教育の重要な施策となります。本事業が交通安全に資することを全国多くの中学校に理解していただき、協力をお願いすることが重要だと考えています。

今回の審査では、その応募作品の中から、教職経験者や編集経験者、国語の教員免許取得者等五名の審査員による予備審査を経て、一次審査に中学一年生、二年生、三年生それぞれ十点ずつ計三十点が残され、それを本審査会（七名で構成）審査員が事前に評価して「審査評価集計表」としてまとめ、さらにその「審査評価集計表」をもとに審査員出席の審査会で厳正な審査・討議を重ねました。その結果、最優秀作（内閣総理大臣賞）一点、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）各学年一点計三点、優秀作（文部科学大臣賞）一点、佳作（警察庁交通局長賞）七点が選ばれました。そして、最終的には最優秀作および優秀作は警察庁長官、佳作については警察庁交通局長により決定されました。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、福島県の中学三年生、鈴木彩花さんの「家族でつなぐ交通安全の輪」でした。青信号になり自転車で横断しようとした際、左折のため右から曲がってきた車に危うく轢かれそうになった数日後、学校での交通安全教室で反射材の有効性を学んだ筆者が、それを夕食時に家族に伝え、安全を守るための対策を皆で話し合う様子が描かれています。さらにこの家族の素晴らしさは、父、母、姉たち、そして本人と、家族全員が約束した安全対策を実行していることで、その姿がよく示されていました。

次に、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）ですが、中学一年生からは愛媛県の大脇理緒さんの「後悔の前に行けること」が選ばれました。大好きな祖父が自転車走行中、ルール違反の車に起こされた事故の紹介から始まり、幸いヘルメットを着用していたために命を落とさずに済んだことに話が進みます。さらに、車と自転車の双方が相手を確認することが重要で、「だろう」「はずだ」ではなく、「かもしれない」という気持

ちを持つこと、自分の存在を相手に知らせることの重要性が上手に示されていました。

中学二年生からは宮崎県の小田原みろくさんの「右、左、右っ!!」が選ばれました。優しくて大好きだった祖父が亡くなった後、その祖父が長女を横断歩道でトラックに轢かれて失ったことを父から知らされます。そのことで、散歩中に祖父から標題にある注意をされていたことの意味を理解し、一層、祖父への思いと交通安全への強い意志が伝わってくる素晴らしい作品でした。

中学三年生からは埼玉県の金子由奈さんの「守りたいもの」が選ばれました。横断歩道のないところを渡るうとした小さな子供に危険を感じ、横断歩道まで誘導して一緒に渡った心優しい筆者の態度と、大人は子供の見本にならなければならないことを、自分への教訓も含めて述べている点が素晴らしいと思いました。さらに、交通ルールにはすべてそれを守らなければならない理由があるので、ただ単にルールを教え守らせるのではなく、その理由を示し理解してもらうことで皆が守るようになる、という主張は秀逸でした。

優秀作（文部科学大臣賞）には、埼玉県の岩館璃沙さんの「交通マナーの大切さ」が選ばれました。小学校に面した自家の前の道路に、学童保育所に子供を迎えに来た保護者の車が多数駐車しているのを見て、そこで交通事故を心配した筆者が、家族で安全対策を話し合い、その危険な状況を両親が学童保育所に伝え、早速に対策が講じられます。自分自身の学童での体験も交えながら、安全に向けての問題解決を家族ぐるみで実行に移す過程が描かれていて素晴らしいと思いました。

佳作（警察庁交通局長賞）には以下の七作品が選ばれました。愛知県の中学一年生、伊藤新太さんの「お互いに気をつけないとね」は、自分が住んでいる地域の日帰り温泉で、出口と入口を間違えた観光客の運転から危険な目にあつた体験をもとに、母の言葉から、他者への責任追求だけでなく、自分自身にも気を付けるべき点があつたことを理解する過程が上手に描かれていました。

愛媛県の中学一年生、馬越真那さんの「いつか自分に返ってくる運転」は、「忙しいときほど、人に優しい

運転をしなきゃね。いつか自分に返ってくるから」と筆者に諭し、自ら実行している母の態度に感銘し、余裕を持って行動することの大切さを自覚する過程がよく描かれている作品でした。

富山県の中学一年生、岡志織さんの「交通事故から学んだこと」は、通学時に姉と乗っていた母の運転する車が右折信号で曲がったところ、信号無視の直進車に衝突された事故経験をもとに、被害者と加害者の両面から交通安全を考察し、そこから加害者になることへのつらさ、車だけでなく自転車も、また歩行中ですら、加害者になる可能性があることを示した作品でした。

栃木県の中学二年生、青木心音さんの「ルールを守る人を増やすために」は、信号のない横断歩道を渡る際、折角車が停まってくれたのに、身振りや車を先に行かせる臆病で慎重な自分の性格を先ず示し、車が停まったら感謝の気持ちを表して渡るべきだという母の意見と対立する。しかし、運転者でもある母の言葉を受け入れ、停まってくれた車に一礼して渡ってみると、自分もドライバーも気持ち良く対応出来た。その経験から、ルールを守る人への感謝の気持ちや態度で、ルールを守る人が増えていくという主張がなされていました。

宮城県の中学二年生、高石孝樹さんの「ほんの少しの意識で」は、小学五年生時、自宅前の路地から道路に出た際、自転車にぶつかり転倒した体験を材料に、自分の不注意を反省し、そこから自分が音頭をとって家族全員で交通安全のためのルールを話し合う。そして注意すべきことを織り込んだ標語作りに励む過程が上手に描かれている作品でした。

兵庫県の中学三年生、新美りをさんの「笑顔の未来へ やさしく運転を」は、中学生として成長した視点で小さな子供たちの安全を切望した筆者が、二回の衝突事故を目撃し、事故は当事者や家族を傷つけるだけでなく目撃者をも傷つけると実感し、そこから技術の進歩による安全対策を様々に考えアイデアを提起している点が高く評価出来ました。

神奈川県の中三年生、吉田爽帆さんの「合言葉は『左右オーライ』」は、母のバイク事故、自身の青信号

横断時にあつた無謀な自転車との事故、二つの事故体験からルールをただ守るだけでなく、左右の確認が大事なことを認識する。特に車の運転中は同乗している家族も一緒に左右を確認し、運転者と同じ立場に立つことが必要で、しかもそのことが同乗者の安全への動機付けになることが述べられていて素晴らしいと思いました。

最後に、数多くの応募作品の読み込みと絞り込みにご尽力いただいた予備審査員および事務局の方々、さらにはまた本審査会において真剣かつ厳正な審査に当たっていただいた審査員の方々に心からのお礼を申し上げます、審査の報告とさせていただきます。

令和7年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員  
— 中学生の部 —

(敬称略、順不同)

---

鈴木春男	千葉大学名誉教授
溝端光雄	交通評論家
吉岡耀子	交通ジャーナリスト
青海正	全日本中学校長会会長
塩崎一馬	公益財団法人三井住友海上福祉財団専務理事
中園和貴	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
井澤和生	警察庁交通局交通企画課長

※本作品集に掲載する作文は、作者の体験に基づく作品のオリジナリティを尊重する見地から、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

本作品集の転載については、次の条件をいずれも満たす場合に限り認めることとします。

- ①交通安全知識の普及、交通安全思想の高揚のために使用すること。
- ②営利を目的としないこと。
- ③転載誌（紙）等を警察庁交通局交通企画課担当あてに送付すること。

---

## 令和7年度交通安全ファミリー作文コンクール 優秀作品集

令和8年2月

**発行 警察庁**

〒100-8974 東京都千代田区霞が関2-1-2

